216
627

普通學要覽

第四

必受 西洋歷史 全

大成學館編纂

特46
11 231

普通學校教員
必携

第四

西洋歷史 全

大成學館編纂

一六一〇一四三 帝國教育會

西洋歷史目次

第一卷　上古史……一

第一篇　古代の東方諸國……一

第一章　埃及……一

第二章　フエニシアの古代……一

第三章　ヘブリー……三

第四章　アッシリア及びバビロニア……四

第五章　波斯の勃興……六

第二篇　波斯と希臘との紛爭……八

第一章　希臘の古代……九

第二章　波斯戰爭……九

第三章　ペリクリスの治世……一四
第四章　ペロポネサス戰爭……一五
第五章　希臘と波斯との交涉……一六
第三篇　歷山王國及び其分裂……一七
第一章　マセドニアの强大及び波斯の滅亡……一七
第二章　歷山王國の分裂……一九
第四篇　羅馬……二〇
第一章　羅馬の勃興……二〇
第二章　羅馬の外國征伐……二三
第三章　羅馬の內訌及び版圖擴張……二四
第五篇　羅馬帝國……二七
第一章　羅馬帝國の隆盛……二七
第二章　帝國の盛衰……二八
第三章　基督教の蔓延……二九
第二卷　中古史……三一
第一篇　蠻人の移住……三一
第一章　蠻人の帝國侵入……三一
第二章　ジャスチニアン帝の偉業……三三
第二篇　基督教徒及び他教徒の爭……三四
第一章　東羅馬と波斯との葛藤……三四
第二章　回々教國の勃興……三四
第三章　羅馬法王及びフランク國の强大……三六
第四章　フランク國及回々教國の分裂並に佛蘭西王國と神聖羅馬帝國との成立……三七

第五章　北人の横行……三九
第三篇　法權の全盛……四〇
第一章　羅馬法王と帝王との衝突……四〇
第二章　十字軍……四一
第三章　蒙古人の西征……四三
第四章　歐洲の政治及び社會の情況……四五
第四篇　法權頽廢の時期……四七
第一章　法權の失墜……四七
第二章　百年戰爭及び國家主義の發達……四八
第三章　自由都市及び義騎の衰替……五〇
第四章　文運の復興……五〇
第五章　蒙古帝國及び土耳古國……五一

第三卷　近世史

第一篇　新世界發見及び宗教改革問題……五三
第一章　新航路及び新陸地發見……五三
第二章　國力平均論の發端……五五
第三章　宗教改革論……五六
第四章　英國宗教の獨立……五九
第五章　舊教の反省並に東洋に於ける傳導……五九
第六章　ネーザーランドの騷亂……六一
第七章　西班牙の東洋貿易……六二
第八章　エリザベス女王……六二
第九章　佛國の內訌……六四
第二篇　三十年戰爭の時代……六六

第一章　三十年戰爭……六六
第二章　英國の政變……六九
第三章　佛國の勃興……七二
第四章　歐洲諸國の東西殖民……七三
第三篇　ルイ十四世の代……七四
第一章　ルイ十四世の内治外交……七四
第二章　英國革命……七六
第三章　西班牙王位相續の變……七八
第四篇　新強國の勃興……八〇
第一章　ピーター大王の雄圖……八〇
第二章　フレデリック大王の偉業……八一
第三章　合衆國の獨立……八四

第四章　カザリン二世及波蘭問題……八六
第四卷　現世史……八八
第一篇　佛國革命及びナポレオン戰爭……八八
第一章　革命の源因及びルイ十六世……八八
第二章　恐怖時代及び秩序紊乱……九〇
第三章　ナポレオンの盛運……九一
第四章　佛帝ナポレオン一世の雄勢……九三
第五章　佛帝ナポレオン一世の失勢……九五
第二篇　歐洲の保守政畧及び基督敎主義……九八
第一章　神聖同盟……九八
第二章　英國の改良……一〇一
第三章　希臘の獨立及土耳古の損失……一〇二

第三篇　自由獨立運動……一〇三
第一章　佛國七月革命……一〇三
第二章　白耳義の獨立……一〇三
第三章　波蘭の叛亂……一〇四
第四章　獨逸及び以太利の叛亂……一〇五
第五章　西班牙の紛擾……一〇六
第六章　葡萄牙の紛擾……一〇七
第七章　瑞西の改革……一〇七
第八章　英國の改良……一〇八
第九章　埃及問題……一〇九
第十章　佛國二月革命……一一〇
第十一章　獨逸及び以太利の自由統一運動……一一一
第四篇　ナポレオン三世……一一一
第一章　ルイ・ボナパルト……一一一
第二章　クリミヤの役……一一二
第三章　以太利統一戰爭……一一三
第四章　合衆國……一一三
第五章　メキシコ國……一一四
第六章　普墺戰爭……一一五
第七章　普佛戰爭……一一六
第五篇　現今の趨勢……一一七
第一章　露土戰爭……一一七
第二章　現時世界各國の運動……一一九
第一　英國の運動……一一九

第二　佛國の運動……一二六
第三　露國の運動……一二七
第四　我國の位置……一二九
第五　其他諸國……一二九

西洋歷史

第一卷　上古史

第一篇　古代の東方諸國

大成學館編纂

第一章　埃及（Egypt.）

埃及の開化早き理由
宗教

埃及は（ナイル）Nile 流域に在るを以て、河水汎濫し、よく土壤の肥沃を得、土人は衣食住を易く得たるを以なり。

全國は上下二部に分れ、元來何れも獨立たりしが如し。

土人は大陽（ラー）Re を信し又萬有殊に動物を崇拜し、人死するも

埃及の政体及族制		これを木伊乃（ミイラ）として保存するの習慣ありき。 國王は Pharao（ファラオ）と稱し、世襲なり、蓋 Pharao は太陽の子孫と いふ意なり、僧あり、王を輔佐して祭祀を司り、其下に武士あ り、農商工、牧畜者、此に次ぎ何れも世襲にして族制を爲せ り。
技藝		建築術は最有名にして、其名世界に喧傳せる尖塔（ピラミット）の如き、高 さは四百五十尺に及び、Hieroglyph（ヒエログリフ）と稱する象形文字を以て王 の功を銘す、蓋國王の墳墓なり、古埃及國創建せられ、Memes（メネス） に都す、創建者は Menes 王なりと傳へらる。
創業	紀元前二七〇〇	遊牧の蠻人 Syria（シリヤ）より侵入し、埃及を征服す、此諸王を Hyksos（ヒクソス） と稱す、牧王（Shepherd King）の意なり。
古代の盛衰	二一〇〇頃	第二十五の朝 Thebes（テーベス）に起り、牧王を國外に放逐して獨立せり。

	新埃及の版圖は Mesopotamia（メソポタミヤ）に達し、Hebrew（ヘブルー）及び Phoenicia（フエニシア） 人盛に入り來れり。 後アッシリアに滅ぼさる。

第二章　フエニシア（Phoenicia）の古代

地勢	フエニシアは地中海の東岸に瀕せる一小國にして、土地狹隘、 地味痩瘠、農耕に便ならざれども、Lebanon（レバノン）山の材は造船に適 し、地勢は航海に便なるを以て、地中海及紅海の沿岸諸島と盛 に貿易せり。
宗教	天体崇拜にして、其主神は Baal（バール）（太陽）なり、故にバール數 といふ。
政体	始め各市獨立にして世襲の國王を戴きしも、後聯合國となれり。

偉業		發音を代表する文字(Alphabet)の發明。
		第三章　ヘブリュー(Hebrew)
ヘブリュー		ヘブリュー人はもと Ur の地に棲息し、牧畜を業とせる蠻民なりき。
建國	二〇〇〇頃	其祖 Abraham に從ひて、Mesopotamia 地方より Canan に移り、一神敎（即ち猶太敎）を奉じ、カナン地方に行はれたりしバール敎を排斥せしを以て、土人に攻撃せらる。
	一六五〇	埃及王に請ひて其保護を求め、Joseph に率ゐられて難を Goshen（埃及の東北部）の沃土に避けしが、後埃及王の虐待を憤り、Moses を首領として埃及を退出し、（これを Exodus といふ）Palestine に移住し、十二種族に分れ神意を以て政を行へり、後十二種族動もすれば相鬪ひ、外敵を防ぐ能はざるを以て、人民は高徳 Samuel に請ひ、
建國及政体	一三二〇	Saul を立て國王とせり是に於て王政となる、次に
王政時代	一〇五五	David 即位して版圖を擴張し、文學を修め、頗繁榮を致しも、
	一〇二五	Solomon 繼ぎて立つに及びて、盛に土木を起して國人を徴發し、埃及王と姻親を結びて他敎を許可せしかば、遂に土人の怨を招く。
王國分裂	九五三	ソロモンの死後國分裂して Judea 及 Israel の二王國となれり。
	七二二	イスラエル、アッシリアに滅さる。
	五八六	ユデア、バビロニアに滅ぼさる。

第四章　アッシリア(Assyria)及バビロニア(Babylo-nia)

位置	メソポタミア及びTigris二大河流域にあり。
首府建設	三〇〇〇頃　Nimrud王始めて此地にChaldea王國を建てしが、後アッシリアに滅せられたり、二〇〇〇年頃なりけむ。
アッシリア人及宗教	一〇二一　アッシリア人ばかグリス上流に棲み、性憤悍戰を好み、Bel(太陽)及Assur(軍神)を信奉せり、紀元前七世紀、既にメソポタミア全部を略し、全八世紀には、フェニシアの諸市より貢獻を徴し、Pargon王遂にイスラエルを滅し、猶太を服し、埃及を占領し、Babylonに至りては、ナイル及び地中海より東はPersia砂漠に達し、北は裏海より南は波斯灣に至るの版圖を有せり。
最大版圖	七二二　アッシリア王は其征服したる領土をして貢玉を戴かしめ、自身は玉の玉と稱して歳貢を徴し、アズール崇拜を命せしのみ、故に結合鞏固ならざりき。
統治政策	六七〇頃
王國滅亡	六〇六　紀元前七世紀の中葉Mongoliansの北方より侵入するや、國紛擾を極め、遂にメヂアキヤクサレスは、バビロニアナボポラッサルと結び、首府Ninevehを陷れて此國を滅せり。
諸國興起	(五〇六―五六一)　アッシリア滅亡後バビロニア、メヂア、フェニシア、シュデア埃及起る。
バビロニアの武威	就中バビロニア最も強く、Nebuchadonezarの治世にして、實にバビロニアの黄金時代なりしも、此王の後國威太に衰へ、遂に

五三八　波斯王 Cyrus（サイラス）に滅されさ。

第五章　波斯(Persia)の勃興

創業王サイラス

波斯は始めメヂアの屬領たりしを以て、サイラス王メヂア王の爲に此國を治めしが、

五五〇　メヂアを併呑し、

五四九　リヂアを降し、尋いてバビロニアを討ち、遂に

五三八　其都城バビロンを陷れ、幽囚せられたりし猶太人を東國に還せり、

カムビセス王

五二五　サイラスの後子 Cambyses（カムビセス）立ち、埃及を滅し、更にフェニシアを征服せしも、メヂアの僧 Gomates（ゴマテス）不在に乘して王位を竊み、王は歸途にして歿せり。

ダライアス王

五二一　王族 Darius（ダライアス）内亂を鎮定して王位に昇れり。

版圖及統治

當時波斯の版圖は、西、地中海より、東、Indus（インダス）河に至り、南、埃及を包含して波斯灣に沿ひ、北、黒海裏海に瀕せり、王は全國を二十州に分ち、各太守を置けり、大に軍道を通じ、要害の地に城砦を築きて、常備兵を設く、貨幣を一定し收稅の法を定む。

宗教

Bactoric（バクトリック）の聖人 Zoroaster（ゾロアスター）の改革大成せしものにして、宇宙は無數の善惡両神の相爭ふ所にして、人間の禍福は其勝敗によりて定るものと信せり。

第二篇　波斯と希臘との紛爭

第一章　希臘(Greece)の古代

希臘の太古政体		希臘の本名は Hellas（ヘラス）にて、グリークスてふ名稱は羅馬人の此人民の地を Graicus（グレークス）と呼びしに出づ、上古は各邦に分れ、各世襲の王ありて政權を握り、軍隊の將たりしがごとし、
ドリア人移住及殖民	一二〇〇頃	Dorian（ドーリアン）人 Peluponiesus（ペロポネサス）に入り、Sparta（スパルタ）、Thebes（テーベス）、Corinth（コリンス）等の邦國を建てたり、人民海を渡りて諸所に殖民地を設立せり。
宗教		多神教にして神は人の如き體を有し智情意を有す、Zeus（ゼウス）（天の神）は其主神なり、數州集まりて隣邦神事同盟（アンフヒクショニー）を結ぶ、
希臘紀元	七七六	オリムピア（Olympia）祭は希臘一般の祭祀にして此歳に始まる、希臘の紀元、
制度	（六五五〇）	ドリア人の南移の後、王政、貴族政治、寡頭政治、僭主政治、民主政治等、各邦各殖民地に用ひられき。
僭主政体時代		

此時代に哲學始めて希臘に起る。		
スパルタの政体	八八〇頃	甲スパルタ（Sparta）、ドリア人南移の後、寡頭政治を建て、二王、五人の Ephor（エフォル）官、公民の議會ありき。
ライカーガス憲法	五五〇	Lycurgus（ライカーガス）憲法を制定せりと、此法は尚武的訓練により公民の階級を維持するを目的とす、金銀の貨幣を廢し、商工技藝を禁ず。
アテネの政体	六二〇	ペロポネサス同盟起り、スパルタ盟主たりき。 乙 雅典（Athens）、ドリア人南移の後、總領（Archon）行政を司る、元來王政なりしが、ドラコ（Drago）法典を編みて平民の不平を抑へんとして失敗せり、

ソロンの憲法
僭主專制
共和政治の復興
ダライアス王源因

五九四　賢人ソロン（Solon）の改革、社會的改革、財政改革、
五六〇　然るに右の改革は貴族平民を滿足せしむる能はず。
　　平民黨の領袖 Peisistratus（ペイシストラタス）僭主となり、建築を興し、美術を奬
　　勵し、大に水軍を修めて、變に備ふ、治大にあがる。
五一〇　雅典の僭主政治終りぐ。
五〇九　Cleisthenes（クレイステネス）出でゝソロンの憲法を改正し、抽籤法によりて高等
　　院を組織し、秘密投票（Ostracism）の法によりて僭主の輩出を防
　　ぐ。

第二章　波斯戰爭（五〇〇―四四五）

ダライアス波斯を一統するに及びアイオニア殖民地は波斯に降
れり、然るに Miletus（ミレツス）の僭主 Aristogoras（アリストゴラス）は波斯の羈絆を脫せ
んとし、雅典等より援を得て叛を起し、Sardis（サルヂス）を焚燼せしもダライアス
王の爲めに、遂に平定せられき王是より深く希臘を銜む。
大擧希臘を討ち海陸共に大敗す、雅典の將 Miltiades（ミルチアデス）之を Marathon（マラソン）に破れり。
アッチカを攻撃す、雅典の將 Militiades 之を Marathon に破れり。
波斯王 Zerxes（ザークセス）父王の遺志を繼ぎ、親ら大軍を率ゐて、
希臘を攻め、Thermopylae（サーモピレー）にスパルタ王 Leonidas（レオニダス）の全軍を滅
し、雅典を焼けり、
雅典大に警戒し Themistocles（ゼミストクレス）遂に異議者を放逐して戰艦を脩め
波斯軍を Salamis（サラミス）に破れり、
スパルタ王 Pausanius（パウサニアス）は波斯の將 Mardonius（マルドニアス）を Plataea（プラタア）に

波斯第一
波斯第二遠征
ザークセス第三遠征
波斯の大敗

五〇〇
四九六
四九二
四九〇
四八〇
四七九

破り、希臘の水軍は Mycale（ミカール）に於て波	四六五
戰爭の終局	四四五
雅典はパルタと共に Aristides（アリスタイデス）Delos（デロス）の船艦を督し、Cymon（キモン）は波斯軍を水陸に破れり、	
ペリクリス(Pericles)の治世	四三五
第三章 ペリクリス(Pericles)の治世	四三五
波斯戰爭以後博學雄辯且つ温厚なるペリクリスは人民の翼賛に	
憲法	四三五
はりて雅典の制度を改め元老院の司法權を割きて民會に委し純	
然たる民主共和國とし、又艦隊を組織しデロス同盟を率ゐ	
文學美術	四三五
又文學を奬勵し雅典の文化を保護せり故を以て有名なる文學者	

業彫刻の大に進歩し雅典は世界文明の中心となれり。	
ソフォクリス(Sophocles)史家(Herodotus)哲學者(Anaxagoras)陸續輩出し又建	
第四章 ペロポネッサス戰爭	四三一
戰爭の源	四三一
ドリア諸邦雅典を妬みつゝあるに際しコリンス其殖民地(Corcyra)の	
ンスを援け是にペロポネッサス戰爭起る。	
此戰爭に於て雅典はコルキラを援けスパルタはコリ	
間に紛擾起るや雅典は(Potidaea)	
ペ氏さへ疫に罹りて歿す。	四二九
ニシアス休戰條約成る。	四二一
雅典の將 Alcibiades（アルシビアデス）シシリー遠征の途に上りしも、反對黨の非	
難に遇ひ、スパルタに走り、之に勸めて雅典を討たしむ。雅典軍	四一五

雅典の衰弱　四〇四
大哲學者　四一五

第五章　希臘と波斯との交渉

スパルタ波斯の紛擾　四二一
セーベスの強大　三八七

當時波斯王 Artaxerxes (アルタークセス) II. 二世の弟 Cyrus (サイラス) 王位を奪はんとし、援をスパルタに乞ひしも、事成らずして歿せり、是より兩國の怨殊に甚しく、遂に兵を交へしが、スパルタ利なく、小亞細亞其他を波斯に讓り、

Antalcidas (アンタルシダス) の條約を結べり。

當時セーベスに二豪傑 Epaminondas (エパミノンダス) 及び Pelopidas (ペロピダス) あり、

戰利なし、ア氏更に雅典の衰運を挽回せむとし、計を以て雅典に歸りしも、事意の如くならずして際遇し、雅典都城は Lysander (リサンダー) に陷れられ、三十僭主を戴くに至り、戰終局を告げき。

Socrates (ソクラテス) Plato (プレートー) 出づ。

貴族の專橫を怒り、兵を擧げて、　三七一
貴族の後援スパルタを Leuctra (ユークトラ) に破り、波斯王の援を得て、　三六二
再び之を Mantinea (マンチネーア) に破れり、然れども後主ミノンダス戰歿せしを以て振はず。

第二篇　歷山王國及其分裂

第一章　マセドニアの强大及波斯の滅亡

フヒリップ王の雄圖　三三一

當時マセドニア王 Philip (フヒリップ) 雄略あり、夙に兵制を革めて軍隊を訓練して近隣を壓し、

遂に兵を以て雅典セーベスの連合軍を Chaeronea (ケイロネーア) に破りコリンスに列國會議を開きて希臘の盟主となる。　三三八

然るにフヒリップ適陣中に刺殺せらる、子歷山大王（Alexander

歷山大王　三三六

亞歷山大王	三三四	the (Great) 繼けり。 Granicus. (グラニカス) し、 Issus (イッサス) に於て大に波斯王の軍を破り、埃及を降
	三三一	海岸に Alexandria (アレキサンドリア) 府を建てたり、同十月 Gaugamela (ガウガメラ) に波斯王ダライアスの百萬の軍を破る、ダライアス北方に遁れ て、
波斯滅亡	三二七	弑せられ波斯爰に滅びき、
大王の東征		王即ち波斯王の繼承者と稱し、北進蠻夷を討ち、更に東方遙に Indus (インダス) 河に至りて歸れり。
大王の經營	三二三	王遠征に際し各州固有の宗教を公許し、結婚法によりて東西の 人種文化を混じ、鞏固なる王國を建てんとせしも、 バビロンに病歿して其功を奏せざりき、然れとも希臘の國語文

	三二二	化を東洋に導きし事は實に不朽の盛事なり。 アリストートル歿す。

第二章　歷山王國の分裂

王國分裂		歷山大王歿して嗣なく、其領地は皆王族幷諸將之を分領して、
雅典		恰も割據の勢をなし、此際雅典は雄辨家 Demosthens (デモステネス) を將 として兵を擧げしも Lamia (ラミア) の一戰マセドニアの精兵に破られ、 自由を失ひ、攝政は或は王位を覬覦し、諸將互に相爭ひ、王族
諸將王號を稱す	三〇一	は紛擾の間に全滅して、
	二八〇頃	Antigonus (アンチゴナス) 先づ王號を稱して諸將之に倣ひしが、 Ipsus (イプサス) の戰にアンチゴナス陣歿せしより、益紛擾を極め、 に至りては大王の領土全く四分五裂す。

羅馬創立及び政体	七五三
宗教	
共和政体	五〇九
社會問題	

第一章　羅馬の勃興

羅馬(ローマ) Romulus(ロミュラス) Tiber(タイバー)河邊の Palatine(パラチン) 丘に城壁を築き、後他を合併して七丘の上に羅馬市を建てたり、當時一王の下に元老院(セネートコマイチア)、姓會(キュリアス)ありて之を輔け、後に至ては一般人民より隊會(コンマイチアセンチュリアス)を組織し、平民にも參政權を與へたりとぞ。

多神教なり、ジュピター Jupiter を主神とす、後に至り各國の宗教を混同す。

タークィナス Tarquinius の時王政廢せられて共和政治となり、統領(コンサル)二人を置く、元老院、姓會、隊會故の如し。

此時羅馬多事なり、平民は兵役に服して貧困に陷り、而も貴族の同情を得ざりしを以て社會上の紛議起る。

護民官(トリビューン)二人を置く繼て平民より成る族會(コンマイチアトリビュース)を設立せり。

平民更に十人の委員を選み十二表の法典を編成せり。

平民は族會の決議を以て法律たらしむ、貴族平民相婚の禁を解く、

平民貴族に迫り統領を廢し、軍隊長(ミリタリートリビューン)を設け、監督官(センソン)を置く。

ゴール(Gael)人羅馬を侵し、都府を燒く、平民甚だ困す、護民官の

リシニアス(Licinius)の救濟の爲め統領を復興し二人必ず平民たるべしと定め其他田制を定めて平民の負債を救ふ、(リシニアス法)

此等紛擾の間に平民は貴族と一致して外に當り、國境を擴め、

遂には伊太利半島の大部を併呑し、半島の人民を三等に區分し、

十二銅表	四五〇
平民政權の要求	
リシニアス法	三六七
以太利半島征服及其經營	二八〇頃

羅馬人（最高級）拉丁人（Latin）以太利人（最下級）とせり。

第二章　羅馬の外國征伐

エピラス王との戰	二七二
カーセージ第一プニック戰爭	二六四

羅馬は此勢に乘し、遂に希臘の殖民地 Tarentum（タレンタム）と戰ふこれ曾てタレンタム人の羅馬の船舶を襲ひし事ありしに因るものにして、タレンタムはエピラスの援を得て羅馬に抗せしが、羅馬は遂に之を降し、且以太利なる希臘殖民地を奪ひき。

Carthage（カーセージ）はフェニシアの殖民地にして勢頗る盛なり。

Campania（カムパニア）の人民 Mesoana（メソサナ）を屠るに及び Syracuse（シラキユース）に攻められ一部は羅馬に一部はカーセージに各援を乞へり、羅馬の援軍至るや、カーセージは既にメッサナを護り、羅馬兵之を攻撃し第

第二プニック戰爭	二一八
シヒオの武勳	二一五
シリア征伐	二〇二
	二〇一

一プニック戰爭起る、戰爭二十三ヶ年に及び羅馬終に勝ちてシシリーを取る。

當時カーセージの大富豪 Hamilkar（ハミルカー）兵を雇ひて西班牙（Spain）に入り、共に Hannibal（ハンニバル）は大兵を以てゴールに向ひ、アルプス山を越えて以太利に侵入す、羅馬大にマセドニアを討す

（Fabius（フヘヒアス）都督）

羅馬の名將 Cipio（シヒオ）西班牙を平けて後カーセージを衝く、時に羅馬の召されて本國に歸りハンニバル敗績し、遂にシヒオと Zama（ザマ）に戰ひて敗績し、遂にカーセージ和を請ひ、茲に第二プニック戰爭終れり。

マセドニア王シリアと共に埃及を割領せひとす、羅馬埃及王

客國征服　一九〇
外征の結果　一四六
　一二三
第三章　羅馬の内証及び版圖擴張　一二三
社會の困難　一二八
　（輝第一ノ二）
グラッカス法　一二三

を援けてまた之を破りて、小亞細亞の西南部を略せり。マセドニア希臘及びカーセージを服し、遂に西班牙半島を占領せり。

羅馬の勢斯如く大なりしも、安逸奢侈の風と共に道德地を掃ひ、昔日の尚武勇敢の氣復た視るべからざるに至れり。

第三章　羅馬の内証及び版圖擴張

羅馬外國征伐の時に當り、内には貴族權を握りて富裕を致し貧者は益貧困に陷りて士氣を失ふに至りしかば Tiberius Gracchus（ティベリウス グラッカス）護民官となりて此法を定め、弟 Caius Gracchus（ケーアス グラッカス）護民官となりて此法を厲行し、貧者を助けて富者を壓せしかば、遂に富者に襲はれ

スラ及マリアスの亂鬨　一五三
ポムペイの征東　一五六
三頭政治　一六三

て自殺せり。

當時紀（ポンタス）王 Mithridates（ミスリダチス）六世羅馬人を虐殺す、貧民の領袖 Marius（マリアス）は富者黨の首領の一人（スラ）と征討の任を爭ひスラ遂に征途に就けり、マリアス之を憤り貧民黨を煽動してスラ黨を殘殺すスラ之を聞き、ポンタスと和し、歸りてマリアス黨を殺戮し、自ら終身の都督官となる、スラ退職の後 Pompey（ポムペイ）は諸處の亂を平け又はスリダチス六世を討してポンタスを占領せり。

ポムペイは元老院の冷遇を憤りて貧民黨の首領本世出の英傑、Caesar（シーザー）と結び、Crassus（クラッサス）を招きて三頭政治（トライアムキレート）を組織し羅馬を分轄せり、クラッサスは Parthia（パルシア）と戰て歿す。

シーザー、ゴールに在て蠻民を鎭撫し勢獨り盛なるを忌羅

シーザーの爭		馬に在り之を排斥せんとし却てシーザーに逐出され、遂に埃及に走り、埃及王トーレミーに殺されき。
	四四	シーザー埃及に至り、Cleopatra（クレオパトラ）を愛し、其夫トーレミーを退けてクレオパトラを女王とし、羅馬に歸りて終身都督となれり。
シーザー遭難	三一	シーザーの威名は元老院に妬まれ遂に共和政治の破壞者と目せられ Brutus（ブルタス）、Cassius（カシアス）等に殺さるる實に三月十五日なりき。
ブルタスの亂		ルタス等を Philippi（フィリッピ）に討滅せり
オクタヴィアナスの統一		第二三頭政治成るオクタヴィアナス、レピダスを殺す、九月二日には Actium（アクチューム）の海戰に於てアントニー及クレオパトラの艦隊を破り、埃及を屬領とせり。

第五篇　羅馬帝國

第一章　羅馬帝國の隆盛

政体	紀元前二七	羅馬暴富を致して進取勇敢の氣象を失し政權をオクタヴィアナスに委す
		オクタヴィアナス Augustus（アウガスタス）と稱す、表面共和制度を持續すと雖實は帝政となりぬ
兵制		近衞兵（プレトリアンガード）を置く。
羅馬府の壯觀	紀元九	羅馬は、廣袤四里に亘り元老院、演劇場、水道等アウガスタスに建築せられ Horace（ホーレス）、Virgil（ヴァージル）等文學家出てたり、アウガスタン、エージと稱するもの即是なり。
		獨逸人羅馬軍を Teutburg（チュートブルク）の森林に破る、羅馬外征の念を斷つ。

一四			アウガスタス歿し養嗣子 Tiberius（ティベリアス）繼き漸次專制の基を開けり。
	第二章 帝國の盛衰		
			第一世紀以後數代治蹟擧らず、帝政或は將師の手に在りき。
六九		維斯巴先（ウエスパシアン）	シリアの將 Vespasian 帝位を簒し、大に紀綱を伸張し、以後數
九八		圖拉眞（トラジャン）	世明帝相踵ぎ、內は文物技藝を奬勵し、外は敵國を征服し、
一一七			Trajan 帝の世に至りて版圖最大となり、
一六一		馬可奧勒流（マーカス アウレリアス）	Marcus Aulerius 帝の時は文化の黃金時代と稱せらるゝ然れども
一八〇			道德紊亂し鄙猥なる風盛なり。
二二六	帝國の衰替		此帝の歿後軍人權を握り廢立を恣にし國勢頓に萎靡せり。
		阿達設爾（アルダシール）	當時東に Ardshir でふものあり。
			新波斯國起りパルシアを滅ぼし羅馬領を侵す、

二八四	第三章 基督教の蔓延	第奧克利先（ディオクレチアン）	Diocletian 帝位に即くや版圖を二分して新帝を置き東西政を行ひ政綱大に張りしも幾干もなくして海內又亂れたり帝は實に羅馬の專制政治の鼻祖なり、
三一三			コンスタンタイン帝帝國を一統す。
三六四			帝國東西に分裂す。
三九三		提阿多西（セオドシアス）	Theodosius 大帝帝國を統一す。
三九五			帝國また東西に分裂す。
四七六			西羅馬帝國滅ぶ。
一四五三			東羅馬帝國滅ぶ。
基督教			
（紀元前）四		耶穌基利斯督（ゼーサス クライスト）	Jesus Christ 伯利恒（ベスレヘム）に生れ救世主として一神の信ずべきを

サシゴス人の運動

ワンダル人等の移住

匈奴の歐州攻撃

西羅馬帝國滅亡

フランクスの強勢

帝の内治

帝の外征及偉業

三九五　サシゴス人は羅馬に反して、直に Theodosius 大帝に服せらる。帝歿して羅馬東西に分裂するに及ひサシゴス王 Alaric は以太利半島を劫掠せり。

四一五　當時 Vandals 人 Alani 人 Suevi 人西南に進行してゴール西班牙等を占領す、サシゴス人之を討し遂に西班牙に入りて一國を建つ。

四二九　ワンダル人アフリカに逃れ爰にワンダル王國を建つ。

四五一　匈奴王 Attila 強兵を率ゐゴールに入り羅馬サシゴス及ひサシゴスの聯合に破られたり。

四五二　翌年以太利に侵入し大僧正 Leo 一世の勸告を容れ歲貢を約して歸れり。

四五三　アッチラの死と共に、ハンの帝國は瓦解せり。

四七六　當時 Heruli の酋長 Odoacer 東羅馬帝國に說き、東羅馬皇帝を廢し、親ら以太利王と稱す、西羅馬帝國滅ぶ。

四八六　是年フランク王、Clovis ゴールを服して Paris に都す、當時

四九三　Anglo-Saxon 人ブリテイン島に入りて許多の王國を建つ。

　　オストロゴス王 Theodoric 西以太利に侵入して、新に王國を建つ。

第二章　ジャスチニアン帝の偉業

五二七　此帝即位後よく內部の紛擾を一掃す、ネストリアン派の僧侶は東奔して景敎と稱して、遂に支那に入れり、帝乃ち先

　　ワンダル王國を滅し、尋いて諸國を征服して大に領土を擴め、又大に城壁を築き、新に羅馬法典を編せし等偉業多し。

五三四

コンスタンタイン及基督教	三一三
	三二五
	三三〇
	三六二
羅馬以外基督教傳播	

說き猶太人に惡まれて磔殺せられたり、使徒等四方に散して敎義四方に傳播し、セントピーター等之を羅馬に傳ふ、國人多く之を傾聽す、賢明の諸帝は其撲滅を計れり。

コンスタンタイン（Constantine）帝基督敎徒の援を得帝位に上り、基督敎を國敎とし、

ニケーア（Nicaea）に宗敎會議を開き信仰箇條を議定す。

都をコンスタンチノープル（Constantinople）に遷す。

ジュリアン帝位に上り極力基督敎を撲滅せんとして成らず。

なほ基督敎は一世紀の頃、既に波斯に宣敎し、三世紀の頃バクトリアン敎と混じて一種マニ（Mani）敎を起し、四世紀にはメソポタミア地方に流布し第六世紀には波斯に行はる。

第二篇　蠻人の移住

第一章　蠻人の帝國侵入

獨逸人	紀元前一〇〇頃
ゴス人の移住	三七三
	三七六

獨逸人は羅馬の北方に見はる多神敎を奉じ標悍なり、曩にシーザーに擊破せられしが、帝政時代漸く勢力を回復し、遂に其酋長は王と稱し、或は羅馬に侵入し、或は羅馬の爲めに其邊境を守りき。

黑海の東北に匈奴（フン）人現れ、ヴィシゴス（Visigoti）人に迫る。

ヴィシゴス人は東羅馬に請ひ難をダニューブ河の右岸に避く之れ蠻人移住の始なり。

サシゴス人の運動	三九五	サシゴス人は羅馬に反して、直に Theodosius 大帝に服せらる。
		帝歿して羅馬東西に分裂するに及ひサシゴス王 Alaric は以太利半島を劫掠せり。
ワンダル人等の移住	四一五	當時 Vandals 人 Alani 人 Suevi 人西南に進行してゴール西班牙等を占領す、サシゴス人之を討し
	四二九	遂に西班牙に入りて一國を建つ。
匈奴の歐州攻撃	四五一	ワンダル人アフリカに逃れ爰にワンダル王國を建つ。
	四五二	翌年以太利に侵入し大僧正 Leo 一世の勸告を容れ歳貢を約して歸れり。
	四五三	アッチラの死と共に、ハンの帝國は瓦解せり。
西羅馬帝國滅亡	四七六	當時 Heruli の酋長 Odoacer 東羅馬帝國に說き、東羅馬皇帝を廢し、親ら以太利王と稱す、西羅馬帝國滅ぶ。
フランクスの強勢	四八六	是年フランク王 Clovis ゴールを服して Paris に都す、當時 Anglo-Saxon 人ブリテイン島に入りて許多の王國を建つ。
	四九三	オストロゴス王 Theodoric 西以太利に侵入して、新に王國を建つ。

第二章　ジャスチニアン帝の偉業

帝の內治	五二七	此帝即位後よく內部の紛擾を一掃す、ネストリアン派の僧侶は東奔して景敎と稱して、遂に支那に入れり、帝乃ち先ワンダル王國を滅し、尋いで諸國を征服して大に領土を擴め、又大に城壁を築き、新に羅馬法典を編せし等偉業多し。
帝の外征及偉業	五三四	

五六五		Lombards（ロンバルド）人以太利に侵入す。
五六八	文化の融和	東羅馬帝威復西方に震はす、基督教は獨逸人と羅馬人との結婚を勸め、人種言語の混同を促し、新文化西歐に起る。

第二篇　基督教徒及他教徒の爭

第一章　東羅馬と波斯との葛藤

		波斯王 Chosres（コスレース）一世及び二世大に國威を伸張して東羅馬に迫る、アフリカの知事 Heraclius（ヘラクレアス）之を擊額す、是より波斯羅馬共に疲弊せり。

第二章　回々教國の勃興

五七一	モハメッド	Mohammed（モハメッド）は Mecca（メッカ）に生れ唯一の眞神の信ずべきを說き自ら其

	ドの事蹟	
六二二	ヘジラ	豫言者なりと稱し國人に攻擊せられてメッカより Medina（メヂナ）に奔れり之を Hegira（ヘヂラ）と稱す、回々教國の紀元。
六三二		モハメッド死し Caliph（カリフ）政教の全權を握りて、諸國を席卷し、
六四一	回々教徒の侵略	遂に波斯王國を滅す、印度に布教す。
七一七		コンスタンチノープルに迫る基督教ヘレスポントを警固す、回々教徒退く。
七一三		回々教徒サゴス王國を滅ぼしゴールに入る、フランクの相國チャールス之を
七三二		Tours（ツールス）及 Poitiers（ポアチアス）の間に破り基督教國の難を
七五〇		救へり。コルドワ教主西班牙半島に起りコルドワに都す。
七五六		バグダッドに教主起り回々教両分す。

第三章　羅馬法王及フランク國の強大

基督敎の東西分離　七二六
ピピンの獻地　七五一
大帝の羅馬帝國　七六八
　七七四
　八〇〇

基督敎徒は回々敎徒に警戒せられ大僧正Gregory（グレゴリー）の時法王（Pope（ポープ））と稱するを得て皇帝の干渉を脫せり、而して兩敎徒畫像膜拜の不可を主張するや皇帝Leo（レオ）三世は之を容れて畫像を破毀す羅馬王法グレゴリー二世之に反對し羅馬の宗敎は全く皇帝より獨立する事となれり。

法王はPipin（ピピン）をしてフランクの王たらしむピピンは、法王の爲めにロンバルド人を討ち侵地を法王に獻せり

ピピン死してチャールス大帝（シャーレマン）繼き以太利王と稱し、次第に諸國を平定す、是を以てレオ三世其頭上に金冠を戴かしめ、羅馬皇帝と稱せしめき。

基回兩敎の東西大國　一〇二
大帝の經營
大帝の領土分裂　八一四
　八四三

是に於て基督敎國は東西羅馬の二帝國に分裂し、東羅馬は一に希臘帝國と稱せらる。

斯くして、シャーレマン帝は其廣大なる版圖を、州及び寺領に分ち、侯伯、僧侶をして之を領せしめ、巡察使を置き侯伯僧正の會議を設けて助言を求めたり。

第四章　フランク國及び回々敎國の分裂幷に佛蘭西王國と神聖羅馬帝國との成立

シャーレマン帝歿し、ルイ其後を受けしも、四子相續を爭ひ、遂に。

Verdun（ベルダン）の和約により、諸子皆其處を得たりき、然して後一時舊帝國は復一統せられしとありしも、

八八七	遂に分裂して五箇の王國となれり。	最後分裂
九八七	西フラン國に於ては Hugh Capet (ユーグ・カペー) 王となるに及び、是に佛蘭西國の基業を開く。	佛國の成立
八八七	東フランクには、Arnulf (アルヌルフ) は German (ゲルマン) 乃ち獨逸(Deutshland)の基を開き、四隣を征服し、帝位に即きしが、子の代に至りて國亂れ、Conrad (コンラッド) 一世立ちしより撰擧によりて帝王を定めたりき。	獨國の成立
九六二	Otto (オットー) 一世位に即く、英邁にしてよく國内を統一して、四隣を定め、法王 John (ジョーン) 十二世を助けて以太利を併せ、法王より金冠を受け、神聖羅馬皇帝と稱せり。(オット大帝)	オット一世神聖羅馬皇帝
一〇三九	ヘンリー三世位に即くに及びて、前後二回以太利遠征を行ひ、法王を任免し、帝の御宇は、帝威國權、實に其熾盛を極めたりき。	

第五章　北人(Northmen)の横行

一〇一七	當時北方に一蠻族あり北人といふ、九世紀の頃、屢フランク王國を犯し、其將 Rollo (ロルロ) の時遂に Normandy (ノルマンディ) を領す。	北人及其侯國
一〇四二	八二七年 Egbert (エグバート) 英國統一の後、又之に侵入し、其將 Cnut (クヌート) 遂に英王となれり。	英國及北人侵入
一〇六六	英王 Edward (エドワード) 三世に一旦逐出されしも Hastings (ヘスチングス) の一戰、遂にノルマンヂー侯 William (ウイリアム) 英國を征服して王となり、封建の制を行へり。	
	北人次第に諸島を侵略して遂に米大陸の北部に移住し、且コンスタンチノープルと通商し、Slavonians (スラヴォニアン) 人と雜居して、露西亞人種を作れり。	北人の航海

第三篇　法權の全盛

第一章　羅馬法王と帝王との衝突

法王皇帝の衝突　一〇七七　當時ヘンリー四世獨逸皇帝たり、時の法王 Gregory（グレゴリー） 七世は教會が社會上に勢力あるに乘じ、皇帝の權勢を抑壓せんと欲し、皇帝の親任せる僧正を黜けたり、皇帝は之に反抗して、遂に法王に破門せられ、親ら Canossa（カノッサ） に至り、哀を法王に乞ひ、僅に特赦せられしも、法王違約の事あるに及びて、遂に之を追出せり。

ウヲルムス會議　一一二一　Worms（ウヲルムス） 會議に於て皇帝は僧侶に采邑を與ふる權を保持し、法王は僧正の任命權を有すと認めらる。

一一三三　遂に皇帝は法王の隷屬たる觀を呈するに至れり。

法王英王の衝突　一一〇二　是より帝國には、法王黨、帝王黨を生じ、法王の勢頗る盛にして、遂に其命令は遠く英國に及び、ヘンリー二世（一一五四―一一八四）に至りては、全く法王の命令を遵奉すべきを誓へり。然して John（ジョン） 英王たるに及びて、カンターバリー大僧正任命權問題に關して、法王と爭ひ、敗れて

大憲章　一二一五　法王に服從し、大憲章（Magna charta）（マグナカルタ） を發布し、臣民の生命財産の安寧を保證せり。

是に於て法王は帝王を左右し、社會萬般に干渉するに至れり。

第二章　十字軍（Crusade）

十字軍の源因　是より先基督敎徒がパレスタインの靈蹟に謁拜するもの太た多かりしが、セルジューク土耳古人（Seljuke Turks）の亞細亞に起

第一十字軍	一〇九五
	一〇九六
	一〇九九
第二十字軍	一一四七
第三十字軍	一一八九
第四十字軍	一二〇二

り、此地を領するに及びて、苛遇を蒙ると太しかりしかば、一僧ピーター之(クラーモント Clermont)に集會を開きて、十字軍の議を定めたり。

佛蘭西、伊太利の諸侯伯、兵を率ゐて出發し、

ゼルサレムを陷れて、ゼルサレム王國を建てたり。

既にして Noureddin(ヌーレッヂン) 起りて王國を攻撃すると急なりしかば、佛王ルイ七世、獨王 Conrad(コンラッド) 三世、第二十字軍を起せしも、無效なりき。

既にして Saladin(サラーヂン) てふもの埃及に起り、ゼルサレムを陷れしかば、英、佛、獨の三王、第三十字軍を起せしも遂に無效なりき。

法王インノセント三世佛國諸侯に勸告して第四十字軍を起す、

十字軍コンスタンチノープルに入りて、希臘加特力と羅馬加特

拉丁帝國	一二〇四
十字軍の結果	
蒙古人の亞細亞征伐	

方とを混じ、市民の反抗するに及び、遂に都を陷れ、拉丁帝國を建てたり、然し第四十字軍も其效を奏する能はざりき。

爾後一二七〇年に至るまで、十字軍を起すこと數回、しかもゼルサレムを陷れしこと二回に過ぎざりき、此れ法權衰替の源因なりし)。

此役に於て、人命財産を失ふ事多かりしも、爲に歐洲の情況著しく發達し、封建制度爲に衰へ、義俠の風起り、學術技藝大に進み、商業も亦著しく發達せり。

第三章　蒙古人の西征

當時支那北部に蒙古種起れり、遊牧の民にして刺摩(ラマ)敎を奉じ、十二世紀には鐵木眞(テムジン)韃靼を平げ、

一二〇六	幹難河上に王となりて、成吉斯汗と稱し、亞細亞を蹂躙せり。
露西亞侵入	
一二二三	蒙古の爲に、南方露西亞を失へり。
一二二七	成吉斯汗の歿後、太宋窩濶台帝位に即き、其將拔都は帝命によ
	り、
一二四一	長驅して露西亞の大公國を屠り、Wahlstatt (Liegnitz) の一戰日
	耳曼兵を鏖せり、然れとも太宋の訃至るや、露國に退き、
一二四三	金黨國 (Zorotaya Volga) を建て、
金黨國	
一二五八	皇帝旭烈兀はバグダットを降して、伊蘭帝國を建て、
伊蘭帝國	
一二七九	世祖忽必烈は、支那を一統して、國を元と稱し、勢に乘じて、
元	
一二八一	遂に我國を犯して敗れたり、然れとも羅馬法王と交通し、大に
	西洋の文化を輸入せしが、其歿後大帝國も四分するに至れり。

第四章　歐洲の政治及社會の情況

歐洲の封建制度	十字軍の結果として、歐洲の社會に著しき影響を及ぼせしは、封建制度なり、此制度はもとフランクの相國チャーレスの創始せしものなりしが、十一世紀に至りては歐洲一般の制度となり各國皆君、臣、陪臣の關係を有せり、而して其稍強國なりしは英國なりしも、十字軍以後、何れも此制衰替して、十二世紀には一般の僧は法王に隷屬して一種の社會を成し、俗人も亦種々の團隊を組織して、義俠的事業に從事し、第十三世紀に至りては又義騎起りて、信義、勇氣を重んじ、常に武技 (Tournament)
諸團躰の勃興	
義騎	

を演じ、決闘を試み、鰥寡孤獨を保護し、貧弱無辜の民を救ふを目的とせり。

義騎の影響

此等義騎の發達は、一方には宗教上の發達と共に、建築上の一大進運を促し、又他方には貴族は法王と連合して、帝王の權を抑制せり。

各國の王權衰ふ

一二六五

而して英國にては、ヘンリー三世大憲章を破るや、改革黨王に迫りて代議院を開かしむ、是れ實に憲法政治の始なり。

獨逸に於ては、皇帝は小侯より選擧せられ、又は外國より迎へられしかば、威振はず。

伊太利は騷亂相繼きて、皇帝の威伸びず、國家の大權は移りてロムバート同盟都市の手に在り。

王權の盛なりしは唯西佛二國のみなりき。

十字軍の後、貴族及騎士の生活の度高まりて、各國の農民率ね苦められたり。

都市の隆盛

都市は反之帝王の保護を受けしが、帝王の權衰ふるに及びて、獨立の觀を呈し、大に殷富を致せり、其最盛なりしは Marseille（マルセーユ）、Genoa（ゼノア）、Florence（フロレンス）及 Venice（ベニス）にして、

ハンザ同盟

一二四一

北方獨逸にては Hansa（ハンザ）同盟を結び、九十五市之に加入して貿易を行ひ、工業も之に伴ひ、又回々教徒と交通し、大に數學、理化學を研究し、英には Bacon（ベーコン）あり、以太利には Dante（ダンテ）あり、其名聲共に一世を蓋へり。

第四篇　法權頽廢の時期

第一章　法權の失墜

フヒリップ四世の改革

佛王フヒリップ四世英邁なり、寺領課稅に關して、法王ボニフェース八世と爭ふや、

一三〇二	始めて Notredame（ノートルダム）に代議士を召集して、國是を一定し、遂に使を遣はして法王を慚死せしめ、其後 Clement（クレメント）五世を立て、	
一三〇九	之を Avignon（アヴィグノン）に遷し、爾後七代、法王は佛王の命に遵へり、	法權振はず
一三七六	於是各國の帝王、侯伯、亦法王の命を用ひず。	
	法王グレゴリー十一世羅馬に歸り、二年にして歿す、以太利、	法王両立
一四一四	佛蘭西各法王を立て、是より一二法王を生じ、各國歸する所を知らず。	コンスタンツ會議

第二章　百年戰爭及國家主義の發達

Constanz（コンスタンツ）の會議に於て、異教徒壓制を遏め、教會の根本的改革をなさん事を議し、英の宗教改革者にして、聖書を英譯せし John Wiclif（ウィックリフ）を異教徒と宣告し、Bohemia（ボヘミヤ）の Huss（ハス）等を燒殺せり。

一三二七	是より先、法王はボルトー附近の英領を渴望し、加之英人は其綿毛の愛顧客たる Ghent（ゲント）Bruges（ブルージ）の佛王の主權を仰けるを好まず、	百年戰爭の源因
一三三七	佛王チャールス四世歿するや、其義甥 Edward（エドワード）三世佛王位を覬覦し、	
	兵を以て Flander（フランダー）に上陸し、爰に百年戰爭の端を開けり。	英國大勝
一四二二	以後佛侯伯の内援によりて英毎に勝ち、	
	チャールス七世僅に Anjou（アンジュー）の地を墾守せり。	ヨーアンダーク
一四二九	時に佛に一少女 Joun Dare（ジョアンダーク）あり、佛の救濟者と稱し、	
	Orleans（オルレアンス）の圍を解き、佛國の急を救へり、是より佛人愛國の精神を喚起し、以後佛軍勝ちて、	
一四五三	英は僅に Calais（カレイ）の一港を有つのみ。	結果

第三章　自由都市及義騎の衰替

歐洲諸國の都市	百年戰爭の結果として、佛の都市は主權を仰ぎ、獨逸及び以太利の都市は、率ね貴族壓制の下に沈淪せり、英の都市は、皆憲法の保護の下に榮え、
スヰス同盟	一四九五　皇帝 Maximilian（マキシミリアン）一世に獨立を認められたり。スヰス同盟は墺佛の兵を破り、
義騎勢力失墜	斯く、都市政權を失ふに及び、市場は物品交換を廢せしを以て、義騎は大に困み、益農民を虐くるに至れり、加之各國皆英國に倣ひ、徵兵の制を採りしかば、義騎は其位置を失せり。

第四章　文運の復興

復古學	當時以太利の諸市は海外と交通し、希臘より學者を招きて大に學術を奬勵せしかば Humanist（ヒューマニスト）てふ一種の學者陸續輩出し、
活字發明	一四三六　レヌイサンス　美術も Renaissance（レナイサンス）てふ古風折衷の一新式起れり。

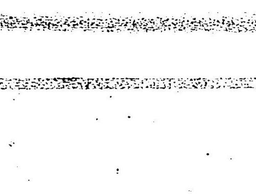
第五章　蒙古帝國及土耳古國

蒙古國	蒙古國分裂微弱の後第十四世紀に至て帖木兒（Timur（チムール）又タメルランと稱せらる）起りて四隣を服せり。
オスマンタークの大戰	一四〇二　當時小亞細亞に、Osman（オスマン）Turks（ターク）起り、兵を以て近隣を侵略せり、帖木兒之に向ひ、Angora（アンゴラ）に戰て其王 Bajazet（バジャゼット）を擒せり、此戰には希臘もオスマン、タークに同盟せしが、破られ後
アンゴラの大戰	
東羅馬帝	一四五三　遂に Mohammed（モハメッド）二世に、コンスタンチノープルを陷れられて、

露國

希臘帝國は滅亡せり。

此後露王 Ivan（イーワン）四世は金黨國を討じ、Czar（ツアー）と稱し、帝國の相續者と稱するに至れり。



第一篇　新世界發見及宗教改革問題

第一章　新航路及新陸地發見

源因

葡萄牙の新陸地發見

一四一二　當時羅馬加特力教國版圖の萎縮と共に商業區域尤に減少し、歐洲一般印度の新航路を得んとを望めり。

一四八六　葡萄牙の王子ヘンリー磁針を利用して、Madeira（マディラ）Canary（カナリー）の諸島を發見し、

一四九八　ヴヨン二世の時喜望峰に達し、

一五〇〇　Vasco da Gama（ヴァスコ・ダ・ガマ）喜望峰を繞りて、始めて印度の Calicut（カリカット）に着す。

Cabral（カブラル）は印度に赴かんとして Brazil（ブラジル）に達す。

一五〇一	以後葡萄牙人は東方に於いて土耳古人と競走し、ゴア Goa を以て印度商業の中心となせり。
一四九二	西班牙の米國發見
	以太利ゼノアの水夫 Christopher Columbus（クリストファー・コロンバス）カスチル女王の保護により、始めて西大陸を發見し、爾來前後四回の航海を行ひて、一五〇四年に至る間に大小の Antilles（アンチル）島 Orinoco（オリノコ）河口及び、中央亞米利加を發見せり。
一五二二	爾後引續き西班牙政府は中央亞米利加に殖民せしめ、
一五三四	フェルナンド Fernando Cortez（コルテス）は Mexico（メキシコ）を征服し、Magellan（マゼラン）は Philippine（フィリッピン）群島を發見す。
	フランシスコ Francisco Pijaro（ピザーロ）は Peru（ペルー）を攻略し、西班牙は宇内の一大殖民國となれり。

一四九七	英國は米大陸北部の沿岸に殖民せしめき、於是歐洲列國の形勢一變せり。

第二章　國力平均論の發端

國家主義	
強國の連合	
一四九五	當時國家主義漸く發達し來れり、始め佛王チャールス八世以太利の Milan（ミラン）侯 Lodovico（ロドビコ）を援けて、ネープルを略し、
一五一六	南方以太利に主となるに及び、歐洲諸強國は佛國の勢強大に過ぐるを慮り、各自營上國力平均の問題に注意し、是に同盟して佛王を以太利より去らしめき。 彼佛王ルイ十二世之を恢復せんとして失敗し、且神聖同盟に迫られて、以太利の侵地を還せり。 西班牙王チャールス一世即位し、

チャールスの雄勢	一五一九	祖父マキシミリアン帝の歿するや、帝位を兼攝し、チャールス五世と稱し、廣大なる版圖を有す、反之佛の勢は微々として振はず。

第三章　宗教改革論

ルーサー	一四八三	法王の專横、僧侶の腐敗を憤慨する志士の多き既に久しく獨逸は先宗教改革を唱へたり。 Martin Luther（マーチン・ルーサー）宗教を研究し、Wittenberg（ウヰテンベルク）大學にて神學を講じ、且 Tetzel（テッツエル）贖罪金を募集せるを攻撃す。
改革初日	一五一七	十月卅一日ルーサー九十五ヶ條の論文を Wittenberg（ウヰテンベルク）の寺門に貼附し、
	一五一九	Eck（エック）を論破し、
ウヲルムス會議	一五二〇	法王の宣告書を寺門に燒く。
	一五二一	Worms（ウヲルムス）の會議に於てルーサー異端と宣告せらる、然るに、ルーサーはサキソニー選擧侯の保護により、始めて經典を獨語に飜譯せり、（一五三四年完成）
獨國の内憂外患		是に於て、帝國は内、大に乱れて、百姓一揆及過激なる宗教改革派を生じ、外、佛國の犯す所となれり、然れども、皇帝は英と同盟して、
	一五二五	遂に佛王を擒にせり、尋いで皇帝は、國内の改革論を撲滅せんとして得ず、
新教起るツウィングリ	一五二九	Speier（スパイエル）に國會を開き、宗教改革を禁ずるや、改革派之に抗議して、遂に新教（Protestant（プロテスタント））の一派を樹てたりき。 此と同時に、瑞西にも Zwingli（ツヰングリ）出でゝ、宗教改革を主張し、

グリ及びカルサン	
獨の宗教及び獨佛の交渉	一五四五
アウグスブルグ會議	一五五二
	一五五五
	一五五六

Geneva には John Calvin 起りて、舊教を排斥し、其所說は、漸次諸國に傳播せられたり。

新教は獨逸全土に盛なるに及び、皇帝頗る之を憂へ、佛と結托して新教の壓制を謀り、

同盟を討平せり、サキソニー侯、憤怒、佛王ヘンリー二世と結び、

皇帝の軍を驅逐して、Passau 條約を締結す、

皇帝はアウグスブルグに會議を開き、獨逸の信教自由を許し、獨逸宗教問題は爰に一段落を告げたりき、之を宗教媾和といふ。

皇帝チャトルス位を退き、墺國を弟に、西班牙を子に與へたり。

宗教獨立の源因	一五三四
新教に改宗す	一五四七

第四章　英國宗教の獨立

當時英國の英才 Thomas Wolsey、ヘンリー八世を輔佐し、皇帝を援けて、佛を破りしも、皇帝の勢力過大ならんとするを見て、王后 Catharine を廢して、獨逸を斷たんとせしが、法王の輒く之を認めざるを怒り、斷然法王との關係を斷ち、

英王をして、英國の教會、及び、僧侶の長たる事を發布せり。

ヘンリー七世歿す、國會の決議及び王の遺詔により、エドワード六世立つ、王、英國の宗教を新教としたり。

第五章　舊教の反省幷に東洋に於ける傳導

宗教改革の氣焰盛なるに及び、

イグナチウス・ロヨラ、フランシス・ザビエル及びピーター・ファーベル等 Jesuits（イエズス）教社を組織し、法王の裁可を得、布教及教育に従事せり。	一五四〇	イエズス會の設立
ザビエルは印度に布教して、Goa（ゴア）を寺領とし、遂に日本に渡りて、布教せしも、意の如くならざりき。	一五四二	
法王 Paul（ポール）三世、羅馬に高等宗教吟味所を設け、嚴に異教徒を處斷し、舊教を維持せんとせり。	一五四九	第二、宗教吟味所設置
Trent（トレント）會議を開きて、舊教の教儀を訂正し、舊教の基礎を定む。	一五四二	
教會の根本的改革。	一五四五	第三、トレント會議
當時西班牙王フェリップ二世國會を設け、常備兵を置き、各地に裁判所、宗教吟味所を設け、國内の特權自治制を廢して内閣制度を創む、	一五六三	第四、フェリップ二世の奮起

大に土耳古を Lepanto（レパント）に破り、威力を西歐諸國に張りて、以て新教の勢焔を抑壓せんとせり。

	一五七一	

第六章　ネーザーランド（Netherland）の騷乱

チーザーランドは多く新教を奉じ、率ね貴族政治なり、フェリップ二世の時、各州の特權を剝奪せられ、人民怒て肖像寺院を破壞せり、王の之を嚴罰せんとするに及び、人民は益蜂起して、海賊隊を組織し、北方の七州は、		源因
ウトレヒト聯合（Wtrecht Union）を作り、聯合憲法を制定し、獨立を宣言せり和蘭（Holland）是なり、是より南方諸州を西領ネーザーランドと稱す、王之を領せんとして成らず、遂に獨立を默許せり。	一五七九	和蘭の獨立宣言
	一五八一	

斯くて西班牙は和蘭を失ひしも、葡萄牙を併するを得たり。

第七章　西班牙の東洋貿易

西班牙の東洋布教及貿易	一五七一	是より先フヒリップ王は Manila（マニラ）府を建て、
	一五八〇	大に我平戸と貿易を開けり。
	一五五七	葡萄牙は澳門を占領して、其僧正領とするに及び、
	一五八一	廣東に布教し、次て南京、燕京に入り、遂に我長崎に來りて、
		盛に商業を營みき。
	一五八七	秀吉基督教を嚴禁し、長崎を沒收するに及び、漸く勢を失へり。

第八章　エリザベス女王

メーリーの舊教政畧	一五五三	エドウァード六世歿し、メリー王位に即ち、輿論に背き、國會を解散し、
	一五五四	西班牙の王子フヒリップ（後のフヒリップ二世）と婚し、新教徒を虐殺せり。
エリザベス女王の宗教獨立	一五五八	(1) エリザベス Elisabeth（Virgin Queen）即位し、フヒリップの結婚要求を拒絶し、新に Episcopalian（エピスコパリアン）教を制定し、國教反對教徒を嚴罰せり。
		(2) 曩に王位を覬覦せしメーリー、スチュアート佛國より歸りて舊教を奉じ、國人に幽閉せられ、逃れて英國に來りしが、又エリザベスに禁錮せらる、
		法王は因りてエリザベスを破門せり、エリザベスは國内の亂を平げ、
無敵艦戰役の源因	一五六八	(3) 和蘭の獨立を援け、西班牙の船舶を掠奪し、

一五八七		遂にメーリーを死刑に處せり、フェリップ大に怒り、
一五八八	無敵艦戰役	無敵艦(Invincible Armada)を編成し、神聖軍と稱し、英國を攻撃し、以て陸軍を掩護せしめしも、カレイに全滅せられき。斯して西班牙は頓に疲弊し、英國は日を逐ひて盛に Virginia に殖民地を設け、而して文學も、女王の保護の下に著しく進歩しシェークスピアー Shakespeare エドマンド Edmand スペンサー Spancer 及 フランシス Francis ベーコン Bacon 等の名家輩出せり。
	英國の隆盛	

第九章　佛國の內訂

	ユーグノート	當時佛に於ては、諸王新教を壓抑し、ジョン、カルサンの新教漸く佛國に入るに及び、攝政太后カザリンは政略上新教を奉戴り、此教徒を Huguenots ユーグノート といふ、是に於て

一五六二	新教徒虐殺	兩教兵を擧げて相戰ふに至りしかば、遂に信仰の自由を許せり。
一五七二		カザリン兩教徒の勢力を平均せんとして、反て互の衝突を生じ、八月廿四日の St. Bartholomew バーソロミュー の虐殺を起せり。
	王位繼承問題	既にしてヘンリー三世子なく、爰に王位繼承問題を生じ、國內惱亂するに及び、ヘンリー三世はナワール王ヘンリーと結び、新教徒を患良なる臣民なりと宣言し、遂にゼスイット僧侶に嗾せられき、因てナワル王は國の南部を略し、Bourbon ボーボン 家のチャールス十世は北部に據れり、既にして十世死するや、ヘンリーは親ら舊教に改め、國民の一致を求め、西班牙の軍を破り、ヘンリー四世となれり。
	ヘンリー四世の天下平定	
一五九二		ボーボン家の始祖ヘンリー四世は Nonte ナント 條例を發布し、ユグノートに信仰の自由を與へ、新舊兩徒の同權を認め、內亂
一五九八	ナント條例	

爰に平定せり。

第二篇　三十年戰爭時代

第一章　三十年戰爭

三十年戰爭の原因

一六一八

アウグスブルグの媾和以後、獨逸は稍鎭靜にして、文運大に發達せんとす、然るに Rudolf（ルドルフ）二世漸く新敎を保護するに及び、新敎徒は漸く盛にして、舊敎徒と軋轢の端を開き、而して舊敎徒なるハプスブルグ家のマキシミリアン最有力にして、近隣の諸侯、其勢を恐れ新敎徒と結び、マキシミリアンは舊敎徒と結びしかば、皇帝は國内の統一を謀り、西班牙と兵を合せ、新敎徒を討滅せんとす、皇帝 Mathias（マチアス）は、先、墺土利及び匈牙利を服し、ボヘミアの新敎寺院を毀てり、新敎徒怒る、爰に三十年戰爭起れり、

新敎徒の叛亂

一六九一

ファーヂナンド二世皇帝となるに及び、舊敎を信せしかば、ボヘミア人は遂に反對し、皇帝討ちて之を定め、又國内の新敎徒を討伐せり。

丁抹の干渉

一六二九

是より先丁抹に於ては Christian（クリスチアン）三世新敎を確立保護し、其子クリスチアン四世は獨逸新敎徒の非運を見、英吉利、和蘭の補助を得、獨逸に侵入し、獨の豪雄 Wallenstein（ワーレンスタイン）と Tilly（チリー）とに大に破られ、

瑞典の干渉

一六三〇

Lubeck（リューベック）の和議を結べり。ワーレンスタイン黜けらる。

瑞典王 Gustavus Adolphus（ガスタヴス アドルフス）獨逸新敎徒を保護せむとし、Pumerania（ポムメラニア）に上陸し、諸處に大勝を得たり、皇帝因て再びワーレンスタインを召す、ワーレンスタイン征討總督の任に當り、

	一六三二	大にガスタワスと「ユッツェン Lutzen」に戰ふ、瑞典軍勝利を得しも而かも王は戰死せり、然るに後ワーレンスタインは貳心ありと疑はれて職を奪はれ、
	一六三四	遂に刺客の手に斃れさ。
瑞典及佛	一六四二	瑞典は尙戰を繼續し、佛相 Richelieu（リシュー）と連合しハッリカを攻撃し、Prague（プラーク）を畧せり、皇帝ファヂナンド三世力竭き、
ウェストファリアの條約	一六四八	ウェストファリアに條約を締結し三十年戰爭終れり。其條件は左の如し、
		(1) 獨逸は、アルセイス地方を佛國に與ふ。
		(2) 獨逸は、前部ポメラニアを瑞典に與へて、國會參列の權を許す。
		(3) 獨逸は、國內の信敎自由を許す。
		(4) 列國は、和蘭及び瑞西の獨立を承認す。

此結果として獨逸は多くの地を失ひ、且つ無數の小邦に分裂して諸侯の主權は認められ、帝國は瓦解せり。

第二章　英國の政變

スチュアート王朝

スチュアート王朝	一六〇三	女王エリザベス歿して嗣なく、蘇王入りて王位を兼ね、ゼームス一世と稱す、これ Stuart（スチュアート）家の始祖なり。
		ゼームス一世王權神授論を唱へ、國會を解散し、舊敎徒を虐待す。
爆發陰謀事件	一六〇五	十一月五日王の國會開會式に臨むを覗ひ舊敎徒火藥を以て議院を爆裂せしめむとし事あらはる、(Gun powder plot)。
チャールス	一六二五	チャールス一世立ち、輿論を容れて、佛と私に丁抹を援け、獨

一六二八	權利請願書	逸及び西班牙の連合を破らんとし、國會と衝突して二回之を解散せしが、止を得ず第三次の國會に於て其權利を承認し、權利請願書(Petition of Right)を裁可せり、此書は生命、財産、及び自由の保護を得ん事を請願せるものなり。
一六三八	チャールス王の專制	以後國會開かれざること十一年間、王、專制獨裁の政を施し、
一六四〇	短期國會	王乃ち國會を開きしが、直に又之を解散せり、之を短期議會と いふ、
	長期國會	仝年十二年に亘る長期議會を開く、議會は王の專制を批難

一六四一	内乱	せしかば王は兵力を以て、
一六四二		反對黨の有力者五人を逮捕せんとして成らず。
		王(ヨーク York)に出奔し兵を召す、是に於て騎黨(カバリー)(王黨)と圓顱黨(ラウンドヘッド)(國會黨)との内乱生ぜり。
一六四七	クロムエル	國會黨の將 Oliver Cromwell(クロムウェル)鐵騎を率ゐ、蘇兵と連合して王を
		議會に幽せり。
一六四八		クロムウェル(ラムプ) Rump 議會を組織す、此議會は王の罪を數へ、
一六四九	王の處刑	之を死刑に處し、共和政治を建つ、之を第一英國革命
		といふ。

第二章　佛國の勃興

一六一〇　ヘンリー　是より先、ヘンリー四世刺殺せられ、ルイ十三世立つ、太后

四世		Mary de Medici 政を攝し、國財を蕩盡す。
メリー太后の攝政	一六一四	後國會を全廢シルイを Bourdeaux に伴ひ、西班牙の王女 Anne と婚せしめたり。
リセリユーの内政	（一六二四―一六四二）	Cardinal Richelieu 實權を掌握し、新敎徒を討じ、王權を確立し、陸海軍を擴張し、科學、美術、文學、を發達せしめ、且三十年戰爭に干渉して大に國威を張り、基礎を固めたり。
外交		
マザリンの政畧	一六四二	Mazarine 相となり、リセリユーの方針を繼續し、二代の王を助け、ウエストファリア條約によりて、アルセースの地を獨逸より奪ひて三十年戰爭を終らしむ。
佛の基礎成る	一六五九	佛、西兩國間の問題は Pyrenese 條約によりて西班牙より數市を得て局を結べり。

西國人の日本交通		
英國人の東洋事業	一五七七	
	一六〇〇	
	一六〇六	
蘭國の事		
	一六一三	
	一六一三	
	一六三九	
和蘭人の	一六〇二	

第四章　歐洲諸國の東西殖民

當時歐洲諸國、力を東洋貿易に致し、殊に西班牙人は、家康の厚遇を受け、伊達政宗の使臣をも羅馬に至らしめたりき。是より先、英人は印度に達し、其他諸國に商館を開き、東印度商會を創設し、其他諸國に商館を開き、ロンドン會社、Plymouth 會社を建て殖民に從事し、殆んと北米の東岸一帶に移住し、我平戸に來れりと雖、然れとも蘭人との競爭烈しく其劫掠を蒙り、遂に我との貿易を絶ち、益印度に商業を擴張し、Madrase を開き、尋いて Bengal Bombey を略せり。和蘭人も東印度商社を組織し、葡萄牙西班牙兩國の殖民地を掠

東洋事業	一六〇二	め、Batavia（バタビア）を根據地とし、
	一六〇六	我平戸に貿易を開き、後印度に商館を建て、一時臺灣澎湖に據りて、英人葡人を東洋より驅逐す。
	一六三六	基督敎を布かざるを盟ひて我との貿易を獨占するに至れり。
露國の事業	一五六四	是より先、露西亞は東伐西攻漸次領土を擴張し、
	一六四八	始めて支那に通じ、益蠻民を征服して、遂に西伯利亞の東北岬に達せりといふ。
東西諸國		**第三篇　ルイ十四世の代**
日本		**第一章　ルイ十四世の内治外交**
ルイ十四世の内治	一六六一	マザリンの歿するや、ルイ十四世万機を親裁し、内閣を組織し、財政を革新し、製造工業を奬勵し、所謂保護貿易政略を以て、

ネーザーランド戰爭	一六六五	英國及和蘭と利益を爭ふ。
		西班牙王フヒリップ四世歿するや、其女婿たるを以てネーザーランドを占領せしも、和蘭は英國及瑞典と三國同盟を結びて、ルイに迫り、
	一六六八	エークスラシャペル Aix-la-chapelle の條約により、ネーザーランドの十二市を除き他は西班牙に還附したりき。
和蘭戰爭		是よりルイは大に和蘭を惡み、英國及瑞典に說き同盟を脫せしめ、親ら和蘭を討ちしが戰困難なりしかば、
	一六七九	ニムウェーゲン Nimwegen の條約を結び、數多の領地を得たりき。
パラチネート戰爭	一六八五	パラチネート選帝侯歿して男嗣なし、ルイは其姻親なるを以て遺產を要求し兵を出しで之を蹂躙せしが外國同盟に破られてリスウヰック Ryswick に條約を締結して和を成せり。
	一六九七	

佛國の文物	ルイ十四世の時は實に佛文學全盛の時にして、一六八〇年以降の所謂ヴェルサイユ朝の衣冠、儀容は全歐の流風を左右するに至り、佛國の言語は、各國外交社界の通語となれり、然れども內謁盛に行はれて、諂諛風を成すに至れり。

第二章　英國の革命

王黨撲滅	チャールス一世弑せらるゝや、蘇國人はチャールス二世を戴きて兵を擧く、クロムウェル討て之を佛に奔らしむ。
航海條例	一六五一　航海條例（ナビゲーションアクト）を發し、英は和蘭に代りて海上權を掌握せり。
クロムウェルの內政	（一六五三―一六五八）　クロムウェル兵馬の全權を握り、Barebone（バボン）議會を組織し、憲法を議定し、躬ら共和政府の保護王（ロートプロテクトル）となり、常備兵を置き、プロテスタンリアン數を國敎と定めき。

王政復古	一六五八　クロムウェル歿し、子リチャード、クロムウェル（Richard Cromwell）職を襲ひ、議會と軍隊との反抗を制する能はずして、
チャールス二世	一六五九　位を辭せり、因て
同上の續	一六六〇　ロンドン（London）に入りチャールス二世を招き、王政を回復せり、之をモンク（Monk）はジョージ（George）王位復古 といふ。
同上	チャールス二世エピスコポリアン數を復せり。
名譽革命	王嗣なし而して假嗣子たる王弟ゼームスは頑たる舊敎徒なるが故に議院中之を排斥するものあり、（Whigs）或は之を戴かんとするものあり、爰に相續問題を生ぜしも、
ゼームス二世の失敗	一六八五　遂にゼームス二世立てり、然れとも幾干もなくして不人望を來し、佛に奔れり。
	一六八八　國會乃ちメリー及ウィリアムに王位を奉呈し、同時に權利宣言

名譽革命　書（Declaration of Rights）を呈し、其裁可を得たりき、之を英國名譽革命といふ。

英蘇兩國合併　一七〇七　是に於て英の立憲自由は確立し、英蘇兩國の國會を一致し、益富強に赴けり。

第三章　西班牙王位相續の變

大戰の源因　一七〇〇　西班牙王チャールス二世嗣なし、佛王ルイ十四世及獨帝 Leopold（レオポルド）一世互に王位を覬覦せり、且バワリア選帝侯も之を望みしも、チャールス二世領地を、ルイの孫フヒリップに與へんことを約して歿せり、フヒリップ五世是なり、於是國力平均の問題より大戰亂を起せり。

戰爭始る　一七〇一　戰端は以太利に開かれ、爾後ルイの勢危し。

大勢一變　ウトレヒト條約　一七一〇　英國主戰說のホイッグ內閣顚覆し、トリー內閣之に代る、

一七一一　獨帝歿し、チャールス帝位を踐みしかば、形勢一變

一七一三　遂に Utrecht（ウトレヒト）の條約を締結して、フヒリップ五世を承認し、

一七一四　Bastadt（バスタット）及び Baden（バーデン）の條約ありて、全く戰爭の局を結べり。

二條約の重なる箇條　右の三條約の重なる箇條は、左の如し、

第一、フヒリップは、西班牙と西班牙領との主となる事。

第二、皇帝は、スパニッシュ、チザーランドと、ミラノと、ネープルとを得る事。

第三、英國は、Gibraltar（ジブラルタル）、Minolca（ミノルカ）島、其他北米に多くの地を得る事。

第四、和蘭は、自國兵を以て、自國とベルジューム國との境の城を守る事。

第四篇　新强國の勃興

第一章　ピーター大帝の雄圖

一六八九	ピーターの西遊	當時露國は尙內地に蟄伏し、漸西歐の文明を輸入せしが、ピーター（Peter）大帝即位するや、アゾフ（Azof）海邊を占領す。
一六九七		ピーターは西歐諸州を旅行し、ザーンダム（Zaantam）に自ら船匠となりて造船を研究す、歸路私に波蘭王アウガスタス二世と同盟を結び、
一七〇一	チャールス十二世北方戰爭	モスコーに歸り、內亂を一掃して諸事大に改良を加へ、躬ら希臘加特力敎主を兼ねて、政敎上の全權を握れり。 當時瑞典王チャールス十二世北天の星斗と稱せらる、ピーター其人心の動搖に乘し、波蘭丁抹と連合し、一瑞典と戰端を開けり、之を北方戰爭といふ。

一七〇三		最初はチャールス轉戰大勝を得しも、此間にピーターは
一七〇九		セント、ピータースブルク（St. Petersburg）を建て、
一七一四		プルトワ（Pultowa）の一戰チャールス大敗し、土耳古に奔れり。
一七一八		再擧せしむ
一七二〇	ニスタット條約	チャールスは フレデリックスハルド（Frederikshald）攻擊の時流丸に斃れき。 瑞典乃ち ストックホルム（Stockholm）及フレデリックスハルドの條約を結び、
一七二一		ニスタット（Nystat）の條約を結び、東岸の地を露國に讓れり。
		是に於て露國はピーターの力に依り、瑞典に代りて北歐に覇を稱するに至れり。
一七二五		ピーター大帝歿す。

第二章　フレデリック大王の偉業

一七〇一		普國はもと波斯の一侯國たりしも、後 Brandenburg（ブランデンブルク）と合す、フレデリック一世、王號を稱し、普國は爰に王國となり、子フレデリック、ウイリアム一世勤儉尚武、よく富國強兵の術を講せり。
一七四〇	墺國繼承戰の源因	フレデリック二世（大王）位に登り、國威伸張を圖れり。是より先獨帝チャールス六世、男子なきを以て歐洲各國の保証を待て第一獨領は分割すべからざる事、第二長女 Maria Theresa（マリア テレサ）を女帝とすべき事、第三、萬一マリア已に先立ちて死せば兄ジョセフの子孫に位を傳ふべき事を規定せり、されど當時政治上の道德に乏しく且つ國威を輝すには手段を選ばざる大王はチャールス歿するに及び突然 Silesia（シレシア）を要求し、兵を以て之を占領せり、之れ墺國繼承戰爭の源因なり。
一七四八	艾國ヘン條約	Aachen（アーヘン）の條約により結局し、普王はシレシアを領有し普國は歐洲の强國中に入れり、而れども條約後の有樣は更に其前の有樣と異るところなく且つマリア、テレサは熱心服讐を計畫せり、墺國は私に露國及び英國と同盟し後英國は普國に黨し露國は墺國と連合するに至れり。
一七五六	七年戰爭	大王はマリア、テレサに先せられんを慮り突然兵を出して、ドレスデンを陷れ、尋いで連戰大に勝ちしも、
一七五九		Kunnersdorf（クンネルスドルフ）に露國の軍を逆擊して敗績し、自殺せんとするに至れり。
一七六二	形勢一變	露帝エリザベス歿し、ピーター三世繼ぎ、普國と同盟を結ぶ、ピーター弑せられて、カザリン二世繼ぎ、援軍を撤回せしも、之に先て大王は墺國の軍を破れり。

英佛の戰		當時英佛の間殖民地戰爭あり、英の海軍はよく佛國をして其殖民地との連絡を絶たしめ、之を北米に破りしも、佛の勢は印度に盛なりき、然れども英人 Clive（クライヴ）の爲めにポンヂチェリーを奪はれ、
パリ條約	一七六三	遂に和を請ひ、英國と巴理の條約を締結せり、而して埃普兩國は Hinbertusburg（ヒュベルツスブルク）に條約を結べり、之を佛國戰爭又 七年戰爭といふ、此條約の結果として シレシアはフレデリックの所有と確証せられ英國はカナダを得益海上の主權者となり、普國は埃露と比肩するに至れり。
結果	一七六六	

第三章　合衆國の獨立

米國殖民地問題	一七六五	英國は多年の戰爭により大に武威を輝し、自由貿易を以て益隆盛に赴けり、然れども費用不貲、國債益增加するを以て、ジョージ三世印紙條例を發し、米殖民地に課稅せり、米國十三州の殖民地因りて New York（ニューヨーク）に會議を開き、Franklin（フランクリン）を遣はして條例を廢せしめしも、本國政府は更に茶稅を課せしを以て、米人激昂 Philadelphia（フヒラデルフヒア）に會議を開きて、本國と絶つ、George Washington（ジョージ・ワシントン）を總督として英國に反す。
歐洲の應援	一七七四 一七七五 一七七六	使節を歐洲各地に派遣して獨立宣言書を公布せり。 歐洲各國は陰に陽に米國を援け、英國は和蘭の殖民地應援を惡み、討て其航海、殖民の事業を殄滅せり。
獨立承認	一七八一	英軍 Yorktown（ヨークタウン）に大敗す。
憲法成る	一七八三 一七八七	巴理及 Verseille（ヴーセイユ）に和議を結び、十三州の獨立を承認せり。 合衆國の憲法成る、共和政体にして大統領を戴き、上下二院あ

第四章　カザリン二世及波蘭問題

カザリン二世、波蘭の叛亂	一七六三	波蘭王アウガスタス三世歿す、當時露帝 Catharine（カザリン）二世英傑なり、フレデリック大王と結び、己の寵臣を立て王たらしめ、波蘭の新教徒及び希臘加特力教徒をして、舊教徒と同權を有せしめんことを要求す、王の之を容るゝに及び、波蘭人遂に反亂を起し、土國は之と連合せり、露國の兵大に土國の兵を破る。
	一七七二	普墺兩國は大に妬心を生じ且隣國の均勢に着目し竟に三國相謀りて
第一波蘭分割	一七八七	第一波蘭分割を行へり。（露國の巨利） カザリン二世は土耳古人を歐洲より驅逐せんとし、墺國と連合して之を破れり。
	一七九一	波蘭普國と結び、新憲法を定めしが、人民此新憲法を悦はず、露國と連合して王を破る、王怒て新憲法を廢す、此際普國は露國と連合し
第二分割	一七九三	第二波蘭分割を行へり。
第三分割	一七九五	而して志士憤慨、暴を露國人に加ふるに及び、 露國は普墺兩國と連合して、悉く波蘭の領地を分割し、波蘭爰に滅びき。

第四卷　現世史

第一篇　佛國革命及ナポレオン戰爭

第一章　革命の源因及ルイ十六世

革命の源因

(第一)ルイ十四世の時、文明の中心、政治の樞要たりし佛國も、内政の紊乱と外國戰爭との結果より、財政困難の悲境に沈淪して、國内漸く不穩なり、(第二)適米國獨立戰爭の事ありて、人民米國憲法の美を羨む、(第三)加之民權自由を主張する學者輩ありて、人心を動搖せしめたり、(第四)王ルイ十六世は人才を擧げて財政整理を圖りしも成らず、物情愈悒然たり。

國民議會　一七八九

王はネッカー(Necker)の策を納れ、國會をヴーセーユに開きしも、平民

革命の端緒

改革

一七九一

は貴族、僧侶と大に確執を生じ、平民は分れて國民議會を成し、王はネッカーを黜け、新に兵士を徵集す、巴里の暴民 Bastil(バスチル)の牢獄を破壞せり。

王乃ち護國兵を設け、ラファイエットを其長官とし、之を制正し、而して國會は漸次改革を斷行せり。

國王の逃奔、新憲法、立法議會

六月國王出奔し、捕へられて巴理に幽せられ、九月國民議會に追られて、新憲法の裁可を與へたり、是に於て立法議會組織せられ、共和黨勢を占め、Mirabeau(ミラボー)伯其牛耳を執れり。Jacobin(ジャコビン)黨勢力を得。Robespiere(ロベスピール)、Danton(ダントン)、Marat(マラー)は實に過激派の首領たりき。

第一回外

王普墺二國の援を乞ふ、穩和派は議會の決議を以て墺國と戰ひ、

國の關係	一七九二	敗れてマルセーユに據る、已にして巴里暴民は八月王宮を犯し、王は議會に遁れて、王權を停止せらる。
國王の弑虐	一七九三	立法議會解散し、尋いで起りし國民集會は、九月廿一日王政を廢して、共和政治の設立を宣言し、王に死罪を宣告す。正月廿一日遂に王を弑せり。

第二章　恐怖時代及び秩序紊亂

第二回外國の關係	一七九二	英相 Pitt（ピット）佛の共和政治を非認し、普、墺、西、蘭、諸國と連合して、佛に迫り、佛國内の王黨之に應援す、是に於て佛國は保安委員會を組織し、穩和派黨を殺戮して、終に敵を擊退す、王后を弑し、基督教を全廢す、又曆法を改正し、九月廿二日を共和國紀元元年一月一日とし、且月次の名稱を改めき。
保安委員の廢止	一七九四	國民集會の議員等は、遂にロベスピールを銃殺し、保安委員會を解散し、漸く温和主義を執れり、
新憲法	一七九五	國民集會は新憲法を定め理事政府を建てたり。

第三章　ナポレオンの盛運

佛の情況		是時佛國は、よく外敵を防き、領地を擴め、内情漸く鎭靜に歸せしも、英國及び墺國は之に反對せしかば、遂に英傑 Napoleon（ナポレオン）Bonaparte（ボナパート）を擧て佛將 Baras（メラス）に從ひ、暴徒を平げて功あり、墺國の佛國を討ずるや、ナポレオン連戰大に墺軍を潰やし、
ナポレオン		宮として佛將 Baras（メラス）をして起たしむるに至れり、ナポレオンは砲兵士
以太利戰役	一七九七	Campo Formio（カムポ フォルミオ）の條約により、墺國をして自身の建設せるシザルピン共和國を承認せしめたりき。

埃及戰役	一七九八
ナポレオン統領	一七九九
第二以太利戰役	一八〇〇
航海中立聯合	一八〇一

ナポレオン王政黨を殺戮し、英國に宣戰し、埃及に向ひしも、Aboukir（アブーカー）の海戰に於て、其艦隊は英將 Nelson（ネルソン）に全滅せられたり。

露、墺、英、葡萄牙、ネープル及び土國同盟して、佛國に開戰を宣告し、佛兵敗る、尋いてナポレオン國會を解散し、第一統領となれり。

ナポレオン、アルプス山を越え、以太利に入り、Marengo（マレンゴ）の大捷を得、

墺國怖れて Luneville（ルーネヴィル）の和議成れり。

佛國は合衆國と連合し、露國は普國、瑞典、丁抹と、航海中立聯合を結へり。

四月ネルソン Parker（パーカー）Copenhagen（コペンハーゲン）を砲撃しと之を陷る、尋いて

第二歐洲聯合	一八〇二
佛國皇帝	一八〇四
	一八〇五

露帝ポール一世弑せられ、アレキサンドル一世立ち、航海中立聯合は解散せられ、アミエンス（Amiens）條約成れども、英は財政困難に陷りしかば、佛と和を媾せり。

八月ナポレオンは國民一般の決議により、終身の第一統領となり、ナポレオン法典を編成す、

ナポレオンは佛皇帝に選擧せられ、

以太利王冠を戴けり。

第四章　佛帝ナポレオン一世の雄勢

英、露、墺、瑞典、同盟して佛の帝政を認めず、佛帝は西班牙に同盟せり。

一八〇五	トラファルガー役	佛西聯合艦隊はネルソンの爲めに Trafalgar（トラファルガー）に全滅せられ、陸軍は墺國を進擊して、Presburg（プレスブルグ）の條約を結ばしむ、墺佛の和成る。
一八〇六	墺國征伐	帝は其兄弟親族を各地に封じ、ライン同盟を結ばしめ、法王を虜にせり、是に於て皇帝フランシス一世は、羅馬皇帝の稱を辭し、墺國皇帝と稱するに至れり。
	普國戰役	此年普國は、佛國に開戰を宣告し、佛帝之を諸處に破り、遂に伯林を陷れ、伯林條例を發布す其條例左の如し、
	大陸同盟	第一、英國を封鎖し、之と交通するを禁じ、英國及び英國殖民地の産物を用ふべからざる事。 第二、ナポレオンの同盟國にして、英艦が其船を臨檢するを承諾し、或は英國に輸出入稅を拂ふ時は中立國たる特權を失ひたるものなる事。 第三、英國及び其殖民地等へ來往する船は之を捕獲する事。
	佛帝の勢力	以て英國を苦しめ、已にして、佛帝進みて普露同盟軍を破りエルシット（Tilsit）の條約を締結せり、佛普の和成る。
一八〇七		倘佛帝は葡萄牙の大陸條例を奉ぜざるを名とし、王を追出して之を占領せり、是に於て其所領は非常に廣大にして、其保護を受くるものも亦多く、最爾たる英國を除きて、全歐殆んど佛帝の旗下に靡けり。
一八〇八	西葡両國の反抗	西班牙人兵を擧けて王ヂョセフを追ひ、 英將 Wellesley（ウエレスレー）は葡萄牙に上陸し、佛軍を破れり。

第五章　佛帝ナポレオン一世の失勢

墺國戰役	一八〇九	是に於て墺國亦兵を擧く、佛帝因て急に西班牙より歸り、墺國に入り、Wagram（ワグラム）に墺軍を破り、維納條約を結ばしむ。
露國征討	一八一二	然るに佛帝は露の英と通せざるを怒り、同盟諸國の兵を募り大軍を以ねて露國に侵入し、次第に北ぐるを追ひて、終に九月Moscou（モスコー）に入る、（モスコーの大火）佛帝露帝の和を請ふを待つこと五週日の後、退去を始めしが、終に大軍瓦解し、佛帝隊伍を離れ、急行巴理の歸れり。
佛帝大敗	一八一三	是に於て普、露、英、及び瑞典、攻守同盟を結び、墺國亦佛を絶ち、佛兵は處々に破る、
	一八一四、	三月巴里遂に陷る、帝は Elba（エルバ）島に竄せらる、其五月三十日第一巴里條約成り、佛は一七九二年一月一日の舊領を受領する事となれり。

維納會議	一八一四	九月維納會議開かれ、（九ケ月間）帝王將相之に列せり。議定せられし重なるものは左の如し
		一、和蘭とベルジック（ベルギー）との合併。
		二、露國の王國となる事。墺國のロムバーディ回復及び露國が王國としてポトランド（ポーランド）を受領する事等。
ナポレオンの再擧	一八一五	三月一日ナポレオン、エルバ島を逃れて佛國に上陸し、佛國皇帝と稱せり、連合諸國、因て Wellington（ウエリントン）を總督として之を討たしむ、
		六月十八日ナポレオン之を Waterloo（ウオータールー）に激撃して大敗し、僅に身を以て免れ

大亂の結局

七月終に英艦に降る、列國決議して之を Št. Helena（セント、ヘレナ）に流せり。

ウェリングトン巴里に入り、露墺二帝及普王と會し、

十一月廿日第二巴里條約を締結せり。其重なる條件は左の如し

佛の境界を一七九〇年の狀に服する事。償金七億法を拂ふ事。

今後五年間ウェリングトンを將として十五万の外國兵を佛の費用を以て佛國内に止めしむる事。

第二篇　歐洲の保守政略及基督教主義

第一章　神聖同盟

神聖同盟設立

維因會議の後、露帝アレキサンダー一世は、墺帝及普王を勸め、巴里に於て神聖同盟を結び、皆基督教を奉じ、互に相援けむことを約す、

英土二國を除き、全歐洲之に加盟せり。

墺相 Metternich（メッテルニヒ）は最も力を同盟に盡し、内には保守專制を取り、外には獨逸及以太利を席卷せむとせり、是に於て獨逸の諸邦は之を怨み、

墺相メッテルニヒの專制

一八一七　大學生は、Wartburg（ワルトブルグ）に會して、大に改革的勢威を示せり、メッテルニヒは

一八一九　因て Carlsbad（カールスバッド）に列國會議を開き、益自由を抑壓せり。

神聖同盟の以太利干涉

メッテルニヒ、又以太利の自由を抑壓せむとするや、Carbonari（カルボナリー）黨起りて之に反し、ネープルに反旗を擧げしも、神聖同盟に干涉せられ、鎭壓せられ、

一八二〇　全西班牙干涉

西班牙に於ても、ファーヂナンド七世位に復して、公

約を破りしかば、叛乱忽ち國内に蜂起せり、神聖同盟は因て王を援けて、マドリッドを陷れ、專制政治を行はしめたりき。

南米諸州の獨立

亞米利加に於ける西班牙殖民地は、ファーヂナンド七世に其自治を奪はれんとを恐れ、前後相踵いて獨立し、僅に一二を余すに至れり、此際神聖回盟は米國に干渉せんとせしが、英國及合衆國の反對に遇ひ、遂に果さゞりき。

神聖同盟葡國干渉

一八二三 米國大統領 James Monroe（ジェームス・モンロー） 教書を發せりや（Monroe Doctrine）

葡蘐牙に於て、ジョン六世逝へられて王となり、憲法を欽定せしが、王の後、Miguel（ミゲル）神聖同盟の援によりて、專制政治を施行せり。

第二章　英國の改良

英國社會の情況

歐洲の大波瀾の際、英國はよく制海權を握り、數多の領地、特權を得たりしも、爲めに費す所極めて多く、財政困難に陷り、且穀物條例（外國よりの穀物輸入を防ぐ條例）の爲め大に下民窮乏せり。

英國社會の改良

一八二〇 ジョージ四世立つ、内には、Huskinson（ハスキンソン）保護貿易主義を打破し、外には、Cunning（カンニング）神聖同盟に反對し、自由民權主義を保護し、各國に率先して希臘の獨立を援助せり。

ウェルリングトン

ウェルリングトン首相となるや、保守主義の政略を採りしが、愛爾蘭問題には頗る寛大の處置を施せり。

第三章　希臘の獨立及土耳古の損失

希臘人の獨立計畫	一八二一
歐洲諸國の應援	一八二二
獨立戰爭	一八二七

基督敎主義の盛なるに乘し希臘人は基督敎を奉して、回々敎の羈絆を脫せんとし、秘密結社を結べり。

露將 Ipsylanti（イプシランチ）會頭となり、兵を擧けて敗る。

一月一日、希臘人 Piada（ピアダ）に會議して、獨立を宣言す、神聖同盟は之を謀叛と認めしも、英相カンニングは極力之を援けたりき。

土帝 Marmud（マルムート）一世は埃及藩王に命して大に希臘軍を破れり。英相、露帝 Nicholas（ニコラス）一世と結び、土廷に忠告するに希臘の自治を許すを以てせしも、土廷聽かず、因て英、露、佛、の三國は七月倫敦會議を開き、十月聯合艦隊は Navarino（ナヴァリン）に於て、擊ちて土耳古艦隊を全滅せり。

英露の干涉及獨立の承認	一八二九

露帝、土廷に勸めて和を議せしめしも、土廷聽かず、爰に露土戰爭起れり、露軍利あり、ウェルリングトン、之を妬み將に英露の大衝突を見んとせしが、幸に普國の盡力により事無く、Adrianople（アドリアノープル）の條約により、土國は、希臘の獨立世襲王國たるを認めたりき。

第二篇　自由獨立運動

第一章　佛國七月革命

ルイ十八世及チャールス十世の政歷	一八一四―一八三〇

佛にてはルイ十八世位に復し、憲法を發布し、温和の政令を施せり、リシリュー相となり益壓制を施し、チャールス十世繼くに及び、自由を束縛し、保守主義を唱ふ、佛國朝廷は漸く大革

制

命前の舊態に復せんとせり。

七月革命

一八二九　Polignac（ポリグナック）内閣を組織し專制主義を確執し、

一八三〇　三月、王の特權は憲法より重きを宣告せり、更に七月廿五日發せし勅令は、國民の大激昂を喚起し、廿七日巴里全市起ちて、王軍を破り、王は出奔し、ルイ、フヒリップ王となれり、チャールス之を襲はんとして成らず、英に逃れたりき、之を七月革命といふ。

白耳義獨立

第二章　白耳義の獨立

佛國は維也納會議に於て、白耳義を政体、言語、宗教、産業を異にせる和蘭と合併し、且和蘭の屬國視する傾向ありしかば、白耳義人の不平甚しく、七月革命の報至るに及び、直に破裂せり。

一八三〇　八月 Brussels（ブルッセル）府率先して事を起し、十二月倫敦會議により獨立を認められたりき。

第三章　波蘭の叛乱

波蘭叛亂

一八三一　波蘭は維也納會議により、露國に隷屬せしも、王の秕政を施くに及びて、波蘭不平禁ぜず、遂に亂を起せり。

一八三一　Warsaw（ワルソー）陷り、全國尋いて鎭定せられ、志士外國に逃れ、遂に露國の州郡に編入せられたりき。

第四章　獨逸及以太利の叛乱

獨逸及以太利の叛亂

當時北部獨逸蜂起し、或は君主を廢し、或は憲法を改正せり、

之と同時に以太利も動搖せしが、メッテルニヒに鎭定せられ、サエナの聯邦會議に於て、自由黨は嚴に抑壓せられたりき。

第五章　西班牙の紛擾

一八三二	西班牙王ファーヂナンド七世歿す、太后は假嗣子 Don Carlos（ドン カーロス）を排し己の生女 Isabella（イサベラ）を立てんとす、急激黨之に反抗し
一八三三	戰起れり。
一八三四	エサベラは自由黨と結托し、連にカーロス黨を破り、カーロスも佛に出奔せり。
一八四五	エサベラの內閣は英と結ひしかば人望を失し、新內閣は佛と結び新憲法を發布せり。

第六章　葡萄牙の紛擾

一八二六	葡萄牙王ジョーン六世死し、王位相續の問題起る、長子 Pedro（ペドロ）一世は既にブラジル帝たりしかば、葡萄牙王たるを得ず、因りて、ペドロの長女を以て王とせり、然るに、王弟之と爭ひ、一時和せしも後之を奪はんとし、ペドロ之を鎭せんとせしも、ズラジルにも內亂ありて、爲にペドロも位を辭せり。
	ペドロ自由黨の援を得て、葡萄牙に上陸し、リスボンを占領す英國は、佛國及ひ西班牙と之を援け、王弟を壓し、內亂を鎭定せり。

第七章　瑞西の改革

瑞西聯邦確立

一八四七　瑞西は聯邦にして、其樞機は一に二三の首邦、及聯邦總會により
て處斷せられたりしが、七月革命の起るに及びて、共和平等の
主義を主張し多年紛擾の後聯邦國家とし、聯邦議會及び聯邦院
を組織せり。

第八章　英國の改良

英國の改良

一八三〇　英王ジョージ四世歿し、ウイリアム四世立つ、又ウェルリング
トン内閣倒れてグレー伯首相となり、議院法改正案を議會
に提出し、

一八三二　通過し、新興の都市多く選擧權を得たり。

一八三三　奴隷廢止案可決せられき。

一八三七　ウィリアム四世歿し、ヴクトリア女王位に即く。(英國とハノー

ヴァとの分離)

穀物條例廢止案通過したりき。

第九章　埃及問題

埃及及土耳古の紛擾

一八三三　時に埃及の藩王メヘメッド、アリは、土領シリアを占領す、土國
援を列國に請ひ、露帝ニコラス之を援く。

一八四〇　英及び佛は露國の援けしを喜ばず、土耳古に說き和せしめき、
然るに露は土耳古を防禦同盟を結び、アリ又約を破りて土耳古
を破るに及び、
英は露、普、墺、と倫敦に同盟を結びて現狀を維持せんとしてア
リに勸告す、アリ佛の援を恃みて從はざるや打ちて之を破り終
にアリをして埃及を以て滿足せしめき。

第十章　佛國二月革命

チーアルの專制

此時佛王ルイ、フヒリップ立憲黨及共和黨より重臣を擧げ、自由主義を執れり、然るに、Thiers（チーアル）内閣の方針は大に共和黨及勞働者の反對を受く、加之、ナポレオン一世の遺骸を迎へ、且埃及事件の失敗の爲、各黨の攻撃盛となり、遂にチーアルは退きて、Guizot（ギゾー）外務卿となり、嚴然保守立憲政策を執れり、又

二月革命の因

一八四〇　西班牙との結婚一條より、共和黨の攻撃を受けたり。

一八四六　人民は革新宴會（レフォーム・バンケット）を開き、改革請願を議決せり。

一八四七　二月革新宴會を開かんとし、ギゾー之を禁止するに及び、終に革命を起し、王は英國に出奔し、假政府は共和政体を宣言しき。

二月革命共和政府

ルイ、ナポレオン

カエグナック Cavaignac 行政内閣の總理となり、新憲法を制定し、大統領を設けたり。

是より先きナポレオン一世の婿ルイ、ナポレオンは、兵を擧ぐる事前後二回に及びしも、毎に破れて各地に流浪せり、此年選ばれて國會議員となるに及びて、巧に人民を籠絡し、十二月遂に大統領となり、憲法擁護を誓約せり。

獨逸議會

第十一章　獨逸及以太利の自由統一運動

一八四八　普墺の内紛

二月パーデンの國會率先して諸邦出版、及結社の自由、陪審制度、市民武裝、獨逸議會を要求し、政府皆之を許せり。

三月墺井エナに暴徒起り、メッテルニヒ英國に出奔せり。尋いでボヘミア人、及び匈牙利人は獨立を企て、帝は遂に位をフラ

シシス、ジョセフに讓り、新帝は憲法を欽定せり。

普國に於ても、人民、王フレデリック、ウィリアム四世に迫りて、欽定憲法を得たりき。

當時獨逸國會勢微にして、其決議を厲行する能はず、獨逸統一問題を議せしも、墺國と衝突するに及びて解散せり。是に於て普國は、獨逸同盟を結び、墺國は聯邦議會を開きて之に反抗せり。

以太利に於ても諸邦相踵いで反す、墺國兵を出して之を討ち、ノヴァラ（Novara）の一戰遂に全く之を破りき。

獨逸議會　一八四八

普墺の交涉

以太利の失敗　一八四九

第四篇　ナポレオン三世

第一章　ルイ、ナポレオン

ナポレオンの政治　一八四九

非常處分（デクレ）　一八五一

佛皇帝　一八五二

第二章　クリミアの役

戰爭の源因

一八五二

戰爭　一八五四

和議成る	一八五五 一八五六

を要求し、露國之に應せざるや、戰爭は各地に起り、英、佛連合艦隊は、埃國及サルヂニア（セバストポール）Sebastpole を陷れたり。巴里條約成る其箇條は左の如し、土耳古領内の耶蘇教の位置を高むる事。黒海の航海を自由ならしむる事。露及同盟國は各其領地を返す事。ダニューブ河の航海權を列國協同の保護の下に置く事。等なり。是より土耳古益振はさるに至れり。

第三章　以太利統一戰爭

埃及サルヂニアの爭	一八五九

クリミア戰爭の結果、露國い埃國を惡みて、普國と親み、以太利人は益自由統一の宿望を達せんことを計るに至れり、而してサルヂニア王 Victor Emmanuel（ビクトル エムマニュエル）二世は之に對する埃國の政略を

ビクトル エムマニュエル	一八六〇

不當とせり、然れども自ら發せずして埃國の事を擧げんを待てり、埃國はサルヂニアの計中に陷り、二十万の兵を出して以太利に進めて諸處に利あり、然れども埃軍は機を失ひしかば、佛帝は親ら大軍を以ゐ來てサルヂニア王と連合し六月大に之を Solferino（ソルフェリノ）に破れり。十月佛帝、埃帝とツーリヒに會して和議を結びき。是に於て、以太利統一殆んと成り、Garibardi（ガリバルヂ）は義勇兵を以て剩せる諸州を占領し、之をサルヂニア王に獻せり、因りてビクトル、エムマニュエル二世は、以太利王と稱するに至りき。

第四章　合衆國

合衆國の

當時合衆國の版圖は已に漸く擴張せられて、愈隆昌に赴き、

膨張

一八四五　上カリフォルニア（Upper California）New Mexico（ニューメキシコ）を合せたりさ。

奴隷問題

一八六〇　當時奴隷問題漸く盛にして、奴隷廢止論者の Abraham Lincoln（アブラハム・リンコルン）大統領となるや、南部十一州は、別に、アメリカ聯邦を建て、Jefferson Davis（ジェファーソン・デイヴィス）を大統領とせり。

南北戰爭

一八六一　南北大戰爭の始まる、南軍勢盛なり。

一八六三　リンコルン奴隷解放令發布以來北軍勢力を挽回し、

一八六五　遂に聯邦の首府 Richmond（リッチモンド）を陷れ、之を討平せり。

第五章　メキシコ國

メキシコ問題

是より先メキシコ國力疲弊し、國債利子支拂を停止し、擔保を流用す。

一八六一　那翁（ナポレオン）三世は英、西、兩國と聯合して征討軍を發す。

一八六二　英、西はメキシコの和議を容れて、撤兵せしも、佛帝は肯せず。

一八六三　帝國を建てしが、合衆國モンロー主義を唱へ、佛、撤兵し、メキシコ亦共和國となれり。

一八六六

第六章　普墺戰爭（又七週間戰爭）

ビスマーク普相となる

一八六一　ウイリアム一世普王となり、軍政を改正し、

一八六二　Bismark（ビスマーク）を首相とす、氏沈毅果斷鐵血政略により、普國の下に聯邦を統一せんことを圖れり。

是より先一八四九年シュレスヰック及びホルスタイン兩侯國は、丁抹王フレデリック、女系を以て王たる理なきを論じ、丁抹

より獨立を謀り、援を獨逸に請ふ、普王兵を出して之を援け、大に丁抹の兵を破る、露、英及び瑞典は因て普王に迫り、休戰せしめき。

一八五〇年七月、丁抹、普國と條約を結び、シュレスヰック、ホルスタインは、獨逸と合せり、ホルスタインは尙戰を繼續せしかば、一八五一年一月普、墺二國は、之に迫り兵を止めしめき。

一八五二年五月英、佛、露、墺、普の五國は、倫敦條約を結び全く丁抹國の安全を保護し、Soudenburg-glucksburg（ゾンデンアルクグリユックスブルク）の Christian（クリスチアン）親王を以て、丁抹の繼承者を定めき。

是に於てクリスチアン九世丁抹王となり、新憲法を裁可し、シュレスヰックを合併せり、獨逸聯邦の中倫敦條約に加はらざりし

シュレスヰック、ホルスタイン問題	一八六三

ものは之に反抗して、ホルスタインを占領し、普、墺兩國は新憲法を以て條約違反なりとし、Lauenburg（ラウエンブルグ）を占領せり。

是に於てビスマーク前三州を占領せんと欲し、墺國はシュレスヰック、ホルスタインをアウグステンブルク公に與へんとし、普國戰意を示すに及びて、墺國は之を聯邦會議の裁斷に委ねんとせり。

普國兵ホルスタインに入り、墺國守備兵を逐ひ出し、諸處に墺兵を破り、終にヰエナを圍む、佛帝乃ち普、墺の間に斡旋し、七月 Nicholsburg（ニコルスブルグ）に於て休戰條約を締結せしめき。

八月普、墺兩國プラーグに條約を結び、

十月墺、以兩國はヰエナに和議を締結し、

此條約の結果として普國は、北獨逸聯邦同盟を組織して、其盟

普墺戰爭の因	一八六五
普墺戰爭	一八六六
プラーグ及びヰエナ條約	

主となり、墺國は獨逸聯邦を脫して、墺太利匈牙利國を建てたり。

第七章　普佛戰爭

戰爭の原因

佛帝、那翁三世は普墺戰爭に斡旋して、而かも己の要求せし地は普國に拒まれ、ルクゼムブルグを購はんとして又ビスマークに妨げられ、大に普國を怨む、且人民政府を攻撃せり、適西班牙革命起り、女王 Isabella（イサベラ）佛國に奔れり、佛國は、西班牙の假政府が、西班牙王に Hohenzollen（ホーヘンツォルレン）家の王子を立てんとせしを拒む、佛國の公使は、普王に謁し、將來に於ても、ホーヘンツォルレン家の王子は、西班牙王たらざる保證を請ふ、普王之を斥け、佛國民大に激昂す、主相、其他の大臣等、開戰を主張し、人心を

佛帝の計畫

一八七〇

鼓吹す。

普佛遂に破裂して、佛國は開戰を宣告せり。

佛帝は、南獨逸の應援を要め、墺、以二國の聯合を得んとして成らず。

佛軍大敗

且 Moltke（モルトケ）に追られ、Saarbrucken（サールブルッケン）を占領せしも連戰皆敗る、佛帝は元帥を止められ。

九月一日 Jedan（セダン）の一戰遂に普軍に降れり。

仝四日巴里人民帝政を廢して、共和政府を宣言し、Thiers（チーアース）歐洲朝廷を歷訪して、干涉を請ひしも、巴里は仝十九日重圍に陷り、

巴里陷落

一八七一

一月廿八日遂に降れり。

二月廿六日ワーセーユの和親條約を結締し、

五月十日フランクフルトの和議成れり、

獨逸帝國組織成る		是より先、一月十八日普王ウイリアム一世ワーセーユに於て獨逸皇帝の位に即けり。
以太利統一成る	一八七〇	四月新獨逸帝國憲法發布せられ、皇帝は普王世襲となりき、九月廿日羅馬なる佛の衛戍退きしかば、以太利軍は直に羅馬を占領し、全以太利を統一し、法王は單に舊教管長となれり。
西班牙の情況	一八七四	西班牙にても内訌起りて、アマデーウス Amadaeus 位を辭し、アルフォンソ Alfonso 兵力によりて王となりしが、西班牙遂に振はず。
佛國共和憲法成る	一八七一	佛にては暴動起りしも、マクマホン之を平げて、
	一八七五	共和國憲法を制定し、大統領を置き、王族を放逐し、爰に共和政府の基礎始めて固まれり。
英國改良	一八六九	當時英國は局外中立を守りて、愛爾蘭國教問題處理に力め、グラドストン Gladstone 内閣は大に内治の改良に從事したりき。

第五篇　現今の趨勢

第一章　露土戰爭

土耳古帝國の内亂	一八七五	ヘルゼゴヰナ Herzegouina 兵を擧けて叛し、土廷之を鎭壓する能はず、ブルガリア人亦叛せり。
露土戰爭の源因	一八七六	露相ゴルチャコフ Gortchakoff は、普墺両國と土廷に勸告し、ヘルゼゴヰナを獨立せしめ、英相ディスレリ Disrael 土廷に叛亂鎭定を勸告す、偶 Salonica カ虐殺の事あり、大陸各國は土國の無情を憤り、軍艦を派遣せり。
戰爭	一八七七	十二月列國使臣コンスタンチノープル Constantinople に會し、土廷に改革を促し、土廷之を拒絶す。 四月露國土耳古に開戰を宣告し、ニコラス大公兵を督して轉戰

大に土兵を破れり、是時に當りて土國内の反徒益猖獗、加之ク
リーチー亦叛し、希臘は之を援けて土國の勢危し、
一八七八　三月 San Stefano（サン ステファノ）の和議成れり。
一八七八　英國極力之に抗論し、墺國之を助け、露國遂に屈せり。
六月十三日より七月三十日迄伯林會議開かる、
其結果大略左の如し
第一、ルーマニア及びセルビアは獨立の侯國なる。
第二、ブルガリアは土國の附屬國となる。
第三、英國は土耳古の安全を擔保し、之を實行せしむため Cyprus（キプルス）
島を得たり、
第四、露國にカース及びバズームを與ふ。
第五、土耳古に、耶蘇教信仰の自由を與へしむ。

第二章　現時世界各國の運動

第一　英國の運動

一八一八　是より先、Clive（クライブ）Hastings（ヘスチング）は印度に領土を擴張し、Cornwallis（コルンウヲーリス）
佛人を驅逐して、印度の征服の盡力せり。
一八二四　英人我浦賀に來り、
薩摩を侵し、轉して Singapore（シンガポール）（新嘉坡）を占領す。
一八二六　緬甸と戰ひて地を得。
一八三九　Aden（アデン）を取る。
清國と鴉牙戰爭を開く。
一八四二　南京條約によりて、香港を割かしむ、尋いて Borneo（ボルネオ）の北部を
古領す。

一八五一　ペーグ Pegu を取る。
一八五七　印度人の反亂を平ぐ。
一八七七　ヰクトリアは印度女帝の位を兼ねき。
（一八五七―一八六〇）　佛と同盟して、清國を破る事二回なりき。
一八七五　是より先、スエス運河開鑿せられて、東西交通の要路となる。
埃及事件　英は埃及財政の困難を利とし、スエス運河の株券を購ひ、財政を監督せり。
一八七九　歷山府に於て、歐洲人屠戮の事あり。
一八八二　遂に埃及を征服し之を監督せり。
一八九九　南亞共和國と兵を交ふ。

第二　佛國の運動

印度女帝

中央亞細亞問題

一八二七　露國は波斯の地を掠めて、英國との關係を絶たしめぬ、是より英露の二國中央亞細亞に角逐し、露は遂に

第三　露國の運動

一八五九　佛國は久しく安南に垂顧せしが、安南人、基督教を殘害せしより、戰を開き、サイゴン Saigon 地方を取る。
一八六二　交趾支那を併有す。
一八六七　安南の條約違反を譲めて、之を討ず。清國安南を援け、清佛戰
一八八二　爭起る。
一八八五　北京條約により東京を佛領と確定す、以後佛の勢力此地方に盛なり。

		清國伊犁の地を占領す、加之堪察加を開墾し、柯太島の北部を占め、我邊境を窺ふ。
一八五八		愛琿條約を以て、清國より黒龍江左岸の地を得き。
一八七八	虚無黨	以來國内に虚無黨蔓延し、
一八八一		終に歴山二世も其犠虐にあひき。
		（社會黨も當時獨逸の間に横行し、獨相ビスマーク深く力を其鎮壓に盡せしも、ウィリアム二世立つに及びて、ビスマークは退隱せしかば計畫遂に成らざりき。）
一八九五		日清の間馬關條約を締結し、日本は清國遼東半島を得るに及びて、露國は、佛、獨二國と三國同盟を結びて、之に干渉し日本をして遼東半島を還附せしめ、其報酬として、清國より、旅順口を借入れたり。

一八九九　皇帝ニコラス二世發議して、〜ーグに万國平和會議を開く。

第四　我邦の位置

各國と條約締結		
一八五四		我邦は合衆國と通商條約を締結し、尋いて英國との條約ありき。
一八五五		露國と條約を結ぶ。
一八六一		普國と條約を結ぶ。
一八六六		幕府使を露國に遣はし、彼我の境界を定む。
一八七五		柯太島を露國に與へて、千島を我に收む。
日清戰爭		
一八九四		朝鮮事件より清國を討ず。
一八九五		清國をして馬關條約を結ばしむ。

第五　其他諸國

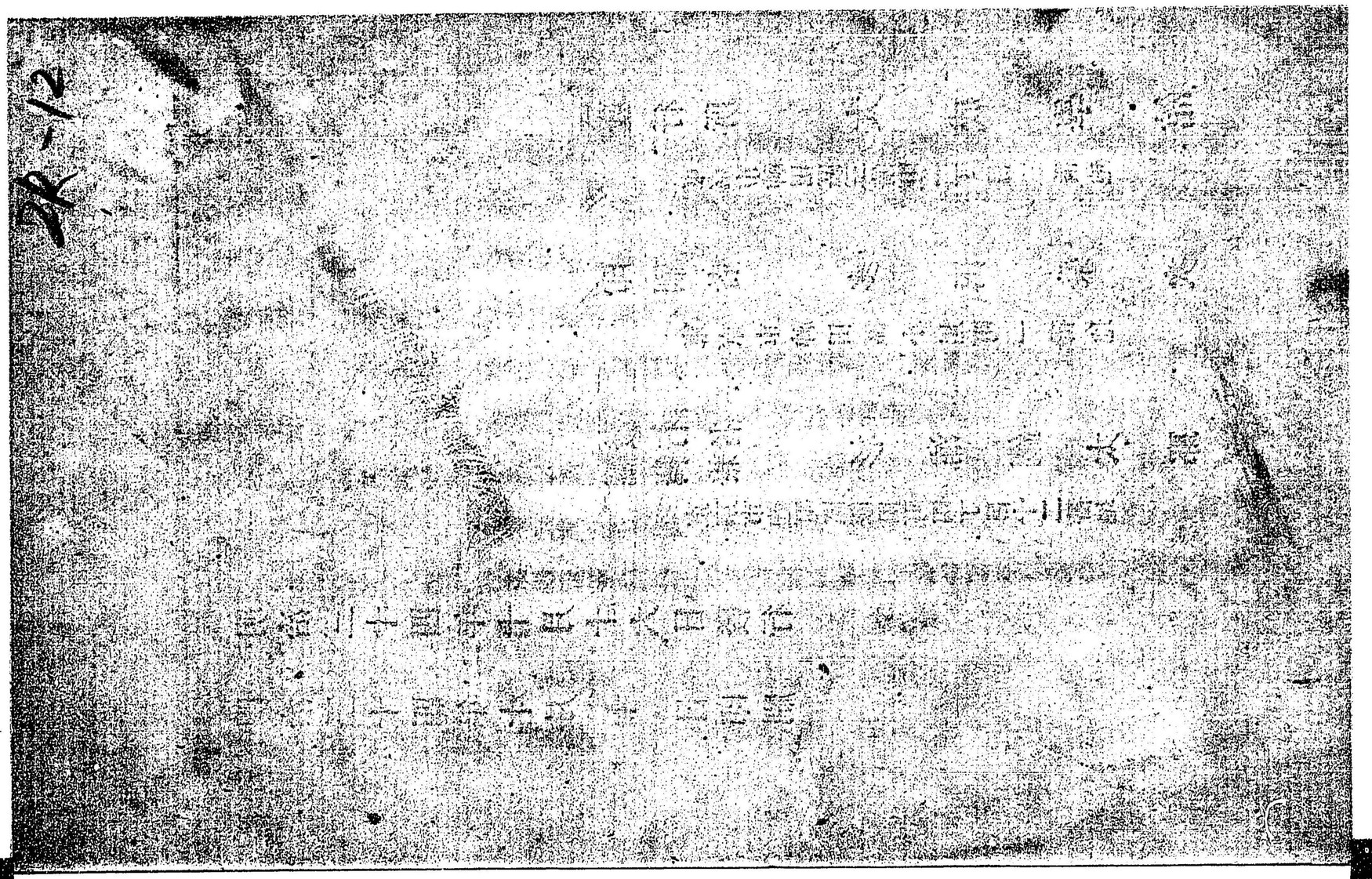
	一八七九	伯林條約以後、露國は佛國と密に防禦同盟を約せしが、
		獨逸は、埃國と攻守同盟を結ぶ、尋いて以太利は佛國に憤る處
		おりて之に加はる。
三國同盟	一八八三	爰に三國同盟なりき。
	一八九〇	英、獨、佛及葡萄牙の諸國、相議して、亞弗利加領土の境を議定す。
希土戰爭	一八九六	希臘、土耳古と開戰し、大敗せり。
	一八九五	キューバ（Cuba）島民西班牙に反く、合衆國之に干渉し、西班牙をしてキ
		ューバ獨立を承認せんことを強請す。
	一八九八	合衆國開戰を宣告し、諸處に西班牙の海陸軍を破れり。

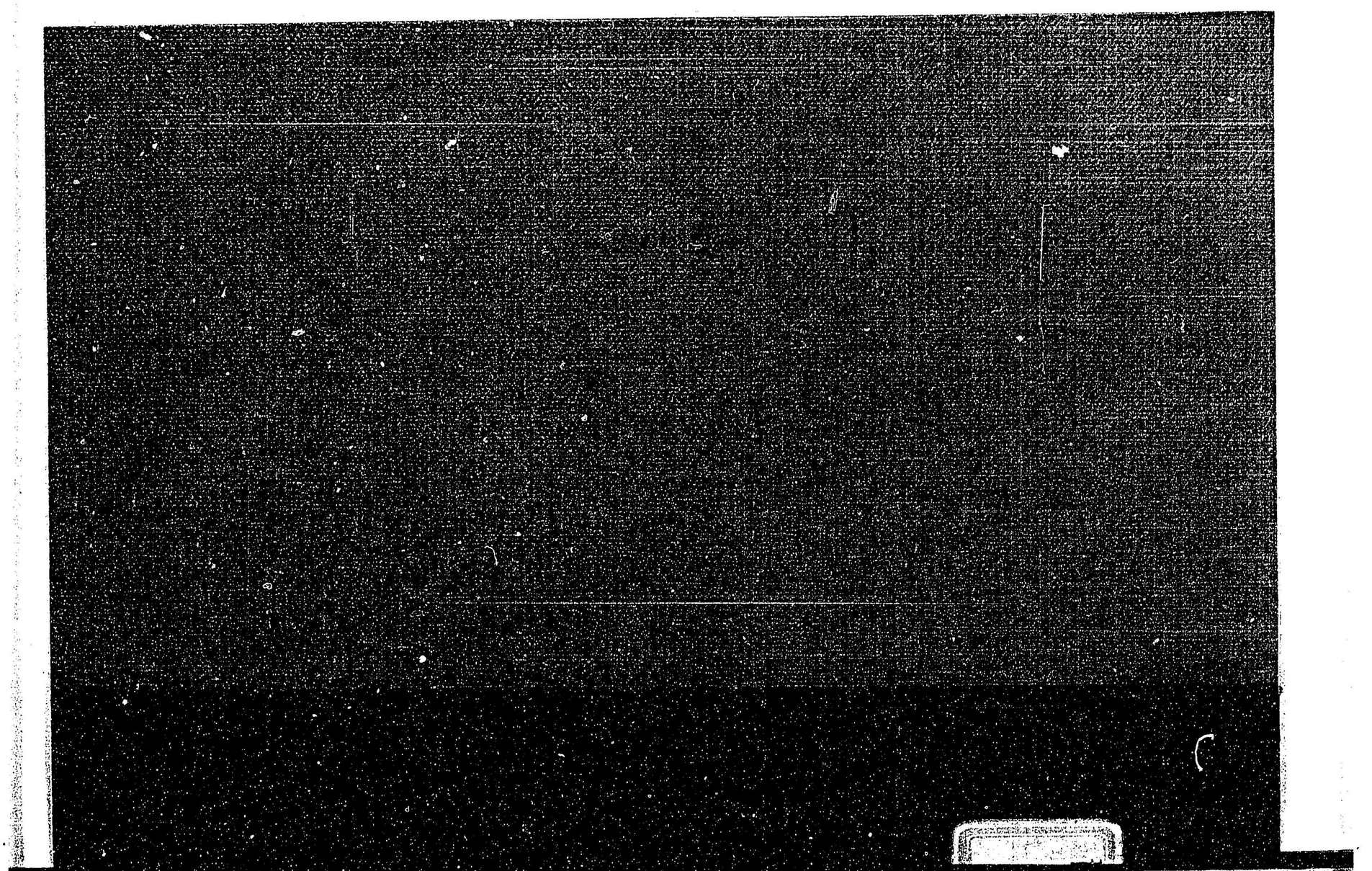
明治三十四年十月　十　日印刷
明治三十四年十月十六日發行

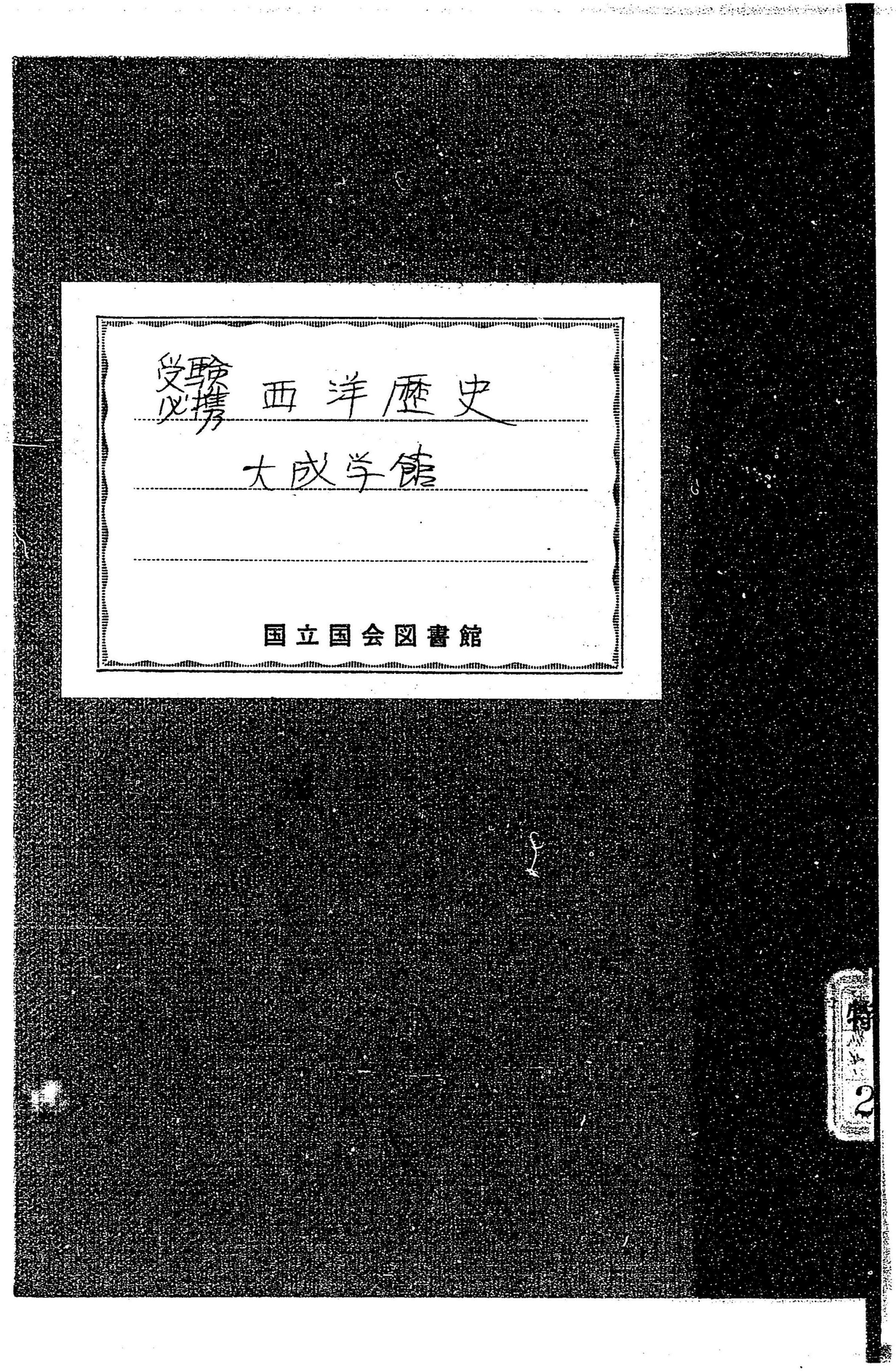
東京市麹町區飯田町四丁目十二番地
編輯兼發行者　杉浦鋼太郎

東京市神田區小川町一番地
印刷者　多田榮次

東京市神田區三崎町一丁目三番地
發行所　大成學舘







049589-000-6

特46-234

西洋歴史（受験必携）

杉浦 鋼太郎／編

M34

BEM-0288